

ダンジョンにエルフを求めるのは間違ってるだろうか

遊真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼、ユウマ・アルセルドはエルフが大好きだ。

そんな彼はベル・クラネルと一緒に出会いを求めて、いや、英雄を求めて冒険する物語。

目次

プロローグ

エピソードゼロ【ユウマ・アルセルド】	1
ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか	

【最初の冒険】	7
---------	---

【ヘステイア・ファミリア】	17
---------------	----

【もつと強くなりたい】	26
-------------	----

【奮闘】	34
------	----

【魔法発現】	43
--------	----

【魔法乱用】	51
--------	----

【怪物祭（モンスター・フィリア）】	57
-------------------	----

【ダンジョン探索】	65
-----------	----

【生き抜くために】	73
-----------	----

【サポーター】	81
---------	----

【決意】	88
------	----

プロローグ

エピソードゼロ 【ユウマ・アルセルド】

ユウマ・アルセルドのことを彼という風に呼ぶことにしよう。

彼は生まれたのも迷宮都市オラリオ、育つて来たのも迷宮都市オラリオ。どこにでもいる家庭に生まれ育ち、元気に育っていった。

そして物語は彼が17の時に動き出すが、彼が昔どんな環境で育っていたのか私は綴ろうと思う。

彼が5歳の頃。ダイダロス通りには彼がいた。彼らはダイダロス通りに住んでいるというわけではない。彼がここにいる理由としては、鍛錬という言葉に尽きるだろう。

「ツク……………ツはあ……………」

「それくらいで泣くな。さあ、立て！」

彼の父親は拳を構えると同時に、彼の父親は声を荒げた。

彼の父親の名はガリユ・アルセルド。【疾風迅雷^{しつぷうじんらい}】呼ばれる。現在L

V・5。所属ファミリア【アストレア・ファミリア】

彼は立ち向かう気力もなく、初日の鍛錬は失敗に終わった。

ガリユははあと自分の不甲斐なさにため息をつき、彼に帰るぞと告げた。

そして帰ると彼は母親に抱きつき、涙を出しながらわんわん泣いた。母親は優しく抱きしめ、よしよしと慰めてくれた。

「ユウマ…どこに行った！」

「あなた、きつと五歳のあの子には辛かったのよ。もうちよつと大きくなつてからにしませんか？」

「だめだ。根性を叩き直すためにも、あいつは今育てる必要がある。ユウマ！」

ガリユはそのまま家を飛び出し、探しに行く。

今一番賑わってる都市と言われているオラリオで子供一人見つけるのは大変だろう。ただ彼はLv5の実力者、本気で探せば、1時間

もかからない。ガリユは屋根から屋根へ飛び移り、探し始める。

彼の母親、ユーナ・アルセルドはその姿を心配そうに見ていた。

一方彼はというと、ダンジョンの目の前の広場にいた。彼も子供だ。逃げるには体力が足りなかったみたいだ。

ユウマの家はオラリオにあるがダイダロス通りに近い場所で、ダンジョンの広場まで結構距離がある。そしてここまで逃げたのはいいが、逃げ疲れて、広場の噴水で座っている。

その時、彼には大きな事件が起こる。

「これより、ダンジョン深層への遠征を始める！ 一班は僕が指揮をとる、二班はガレスが指揮をとる、合流は18階層だ。未到達領域47階層を目指す！ みんな心してかかれ！」

『おう!!』

小人族バルウ4が大所帯の前で指揮をとっていた。彼はこの人を見て、感じとった。父さんより強いと。

ガリユは立派な冒険者で、いつも正義の味方と名の高い「アストレア・ファミリア」に入っているガリユが彼はとても誇らしく思っている。

けれどあの小人族バルウムはガリユに持っていない何かを持っているのかと思っただ。それは何かわからないが、きっと【勇者】でいられるほどの強さを持っているんだと思っただ。

そんな【勇者】を見て、感情は高鳴らなかつた。【勇者】を見たところで自分とは違うんだし、彼のようにには絶対になれない。そのことがわかっていたから、ただの景色のように彼は見つめていた。

しかし彼の心を動かす人物がいた。それが、「リヴェリア・リヨス・アールヴ」彼は一瞬だけ、景色だった光景が景色じゃなくなった。

そう、彼は5歳の時に彼女に惚れた。その時は、心臓が高鳴つた。つばを飲み込む時に、大きく喉を鳴らし、その人だけを見続けた。

「おいクソガキ、こんなところで何やってやがる」

「あ、父さん！ あのな！ きつきき…… イデデデデデデデデデデデツツツ!?」

ガリユはやつとの思いで見つけた彼の後頭部を掴み、軽々と持ち上げる。

「まあ、こんなもんにしといてやる、で訓練だが………。」「ねえ、父さん!」………「なんだ?」

「オレ強くなりたい!あの人を守るくらい!」

彼が指をさしたのは、リヴェリア・リヨス・アールヴ。彼はリヴェリアよりも強くなつて、彼女を守りたいとそう父親に宣言した。ガリユは呆れた顔をしながら、ため息をつき、言葉を告げた。

「彼女は俺をよりも強いぞ、俺を超えなければ話にはならないぞ?それでもお前は彼女を守りたいと願うのか?」

彼は曇りない笑顔で、すぐさま答える。

「うん!強くなつて守つてみせる!」

「なら、俺と鍛錬して一緒に強くなるうな?守りたい女を見つけたのはいいことだ」

ガリユはフツと笑いながら手を伸ばし、彼の頭をくしゃくしゃと撫でた。くしゃくしゃと撫でた手をそのまま彼の左手を握りダイダロス通りに向かうのであった。

彼の恋心はいつまで続くのかガリユは心配であったが、ただ今は、父親と息子という感じがしてガリユは幸せを噛み締めていた。

「うわあ、今日も可愛いなあ」

彼は日課のように、「ロキ・ファミリア」の遠征が始まると見に行っていた。理由としては、それはもちろんリヴェリアを見るためである。

いつも鍛錬して、辛い思いを吹き飛ばしてくれるそんな存在がリヴェリアだった。大きな声で叫んだりはしなかったが、いつも噴水の上で、リヴェリアさんのことを心の中でずっと応援し続けていた。

彼女はいつも凛々しく、遠征の時は緊張しているファミリアの人にいつも声をかけ、緊張を和らげさせていた。それを見るたびにリヴェリアさんがいる【ロキ・ファミリア】に入れたらなんていいことだろうと、何度思ったことかわからない。

彼は【ロキ・ファミリア】遠征を見送ると、父さんがいるダイダロス通りに急いだ。

彼が12歳の時、彼の父親は死んだ。昨日まで、時間があれば鍛錬をしていたガリユが死んだ。

その現実には直面したのは、ユーナからの報告であった。ユーナはギルドからその報告を受け取った。その報告は、「アストレア・ファミリア」Lv3、二名。Lv4、八名。Lv5、一名死亡。そう書かれていた。

死因は怪物モンスターによるものだが、はつきりとした死因が書いていない。ユーナはギルドで話を聞く時は、流星に衝撃を受けていたが、泣きはしなかった。ユーナの中には消失感と絶望の中にズブズブと入っていく感覚がしていたのだろう。

家へ帰るとユーナは玄関で泣き崩れた。子供のようにわんわん泣いた、いつぞやの訓練初日後の彼のように。

そして彼はというと、彼は泣きはしなかった。もちろん悲しみは確かにあったのだろう、けれど冒険者が死ぬことなんてよくあることだし、よく知っていることだった。

いつか、父親も死ぬのではないのだろうかと思っていた。彼は怒りという感情の方が強かった。ダンジョンというのはなんなのかを考えるうちに、自然と怒りが湧いてきた。彼は父親を屠った怪物モンスターを殺してやりたいと改めて思った。

彼は父親が殺された後、父親の父親でもある。彼の祖父に剣を教えてもらっていた。拳で戦っていた彼からしたら剣なんて使ったことないから、びつくりするほど難しかったが、剣の使い方を17になる時まで祖父に剣の扱い方を教えてもらっていた。

そして彼が17歳になった頃、ファミリア探しを始めた。「アストレア・ファミリア」というのを最初は探したが、この都市から消えたと言われている、見つけ出すことができなかった。

そして好きな人のいるファミリアに向かおうとしている時だった。彼と同じく門前払いを受けている、白い髪ヒューマンの人間がいた。いかにも

弱々しくて、兎みたいな印象で、オラリオに今日来た人物なのか、ワタワタしていた印象があった。

「すつ、すみません!」

白い髪の人間ヒューマンは街中で歩いていると肩がぶつかり、謝っていた。ぶつかったのは悪い冒険者とも知らずに謝り、その場から歩いていた。彼は金を取られたなど、そう感じた。

なんだか彼から目を離せなくなり、彼についていくことにした。そして夜になり、宿に泊まるのか、宿屋に入っていくが、やっぱり金を取られたようで、渋々宿屋から出て来た。

「ど、どうしよお〜」

そんな弱々しい声で、頭を抱えていたヒューマンに彼は飛び出して行き、ヒューマンの前に出る。

「あのさ、よかつたらうち来るか?」

「へ?あ、あなたは?」

「オレはユウマ・アルセルド、君は?」

「ぼ、僕はベル・クラネルです。あ、あのそれでうちに来るっていうのは?」

ベル・クラネルと名乗った少年は彼の差し伸ばされた、手を握り立ち上がる。彼はこのベルに愛着が湧いたのだろう。彼は想い人リヴェリアがいるが彼とはそんな感じではなく、ただ純粋に彼のことが気に入って、守ってやりたいというそんな感情が出てきた。

「で、でも見ず知らずの僕を家にあげるなんて、迷惑じゃないんですか?」

「まずオレが君をここに放置して来たら、オレが母親に怒られちゃうからさ、オレを助けると思ってさ。一緒に来てくれないか?」

「で、でも……………」

「ああ〜もう!優柔不断な人は女の子から嫌われちゃうぞ!」

「ツ!いい、いきます!行かせてもらえませんか!」

ベルは女の子から嫌われちゃうぞという単語を聞いたら、ベルはすぐさま、返答してくれた。彼とベルは一緒に歩きながら、自身のことを話していった。

彼の父親のことや、過去のことまで話すなんて彼は思ってたが気が緩んで話してしまっていた。ベルは真面目な子だ。彼の長い話も真剣に聞いてくれる。時には、彼と想い人のことを話すと目を輝かせて聞いていた。

幸いなことに今日は母親は夜勤に出ている、家についても、明かりは付いておらず、ベルと二人きりで過ごした。自分の部屋に、布団を二枚ひいて、ベルと一緒に今日は過ごす。

ベルの話も聞いた、生まれた時から両親がおらず、代わりに変なことを教える祖父と暮らしたという。そんな話を聞きながら、彼とベルは一緒に笑いあっていた。

「ねえ、ユウマさん」

「ユウマでいいよ、オレの方が年上だけどあんまり気にしないでいいよ」

「な、ならユウマ。ねえ、よ、よかったらただけだよ。僕と同じファミリアに入らない？」

ベルは恥ずかしいのか、少し顔を赤くしながら彼に尋ねた。彼は素っ頓狂な顔をしながら、答えた。

「え？何言ってるの？オレ、もうベルと同じファミリアに入るつもりだったけど」

「え!?! そうなの!?! 結構これ言うの恥ずかしかったのに……………」
ユウマは僕の最初の友達だからさ、ユウマと一緒に冒険者になれたらいいなあなんて思ってたんだ」

「オレも同じ気持ちだったよ」

彼とベルは少しだけ見つめあって、耐えきれなくなつて、笑い出す。彼は想い人と最高の友達を冒険をする前に見つけた。

さあ、これで私からのお話はおしまい。ユウマ・アルセルドの過去はこんな風に彩られている。これから彼とベルはオラリオで大きな存在へと動き出す。さあ、始めよう。

これは少年達が歩み、女神が記す。

ファミリア・ミイリス
——【眷族の物語】——

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

【最初の冒険】

「お願いです、僕たちをファミリアに入れてください！」

「お前らみたいなひよっこはうちのファミリアに必要なえなあ、ガハハハハ!!」

三日月が浮かぶ夜、二人の少年があるファミリアの前で交渉する。だがその言葉は神には通らなかつた。二人の少年は三日もファミリアを探し、歩き回っている。

この最大都市オラリオにはファミリアがいくつか存在するが、この三日間探し回るが、どこも家族ファミリアにしてもらえない。

「はあ、今日もダメなあ」

「そんな落ち込むなってベル。いつかオレらの魅力に気づいて家族にしてくれるファミリアがあるって」

はあ、と落ち込む少年ベルに一人の少年がポンポンと肩を叩く。

ベル・クラネルこの少年はダンジョンに出会いを求めて、オラリオにやってきた少年。

「けどこんなはこの街が広いなんて思わなかつたよ。ユウマはここに住んでるからわからないと思うけど」

「まあな、生まれた時からこの街にいたしなこの街はそこそこ詳しいからファミリアにすんなりと入れると思つたら全くそんなことなかつたな」

夜道を歩きながらベルとユウマは喋り出す。

ベルとユウマが出会つたのは四日前、ベルがこの都市に着いたばかりのこと、ベルが財布を冒険者から盗まれてしまい、それを見ていたユウマが拾つて、今ユウマの家に住まわせてあげてるのだ。

「ユウマでもほんとにいいの？一緒に住ませてもらつてるけど迷惑じゃない?」

「迷惑じゃねえよ。むしろ母さんが喜んでるだろ。『息子が二人に

なつたわ!』なんて言ってるし」

ユウマはオラリオに二人暮らし、母親と息子のユウマだけの二人暮らしだ。父親は昔冒険者だったらしいが、今はもういない。冒険者として消えていった。

ユウマは父親のことを思い返し、拳に力が入る。ユウマは物心ついた時から拳を握っていた。父親に鍛えられていたのだ。いつも父親が言っていたことがある。

「もし俺がいなくなったら、お前が母さんを守ってやってくれ、母さんに寂しい思いをさせるなよ?」

この言葉はいつもユウマの脳裏の片隅に残っていた。

「ユウマ?」

心配そうにベルはユウマの顔を覗き込んでくる。

「ああ、大丈夫だ。そろそろ帰ろうか」

「うん」

帰宅するのに歩いて15分くらいの場所にユウマとベルはいる。ベルと一緒に歩いて帰ろうとユウマは顔を上げる、何かしらの違和感がユウマは感じ後ろを振り向く、目に入ったのは偶然だった。

ユウマの母親がバベルの塔に向かってフラフラ、右左に大きく揺れながら歩いている。歩き方が普通じゃない。まるで何かに取り憑かれているようだった。

ユウマはなぜか心臓の音が強くなった。まるで心臓がユウマの体内から出てくるような錯覚までしていた。呼吸が、荒くなり、過呼吸になっていく。ユウマは突然の過呼吸にうずくまってしまう。

「ユウマ!?!大丈夫!?!」

ベルがユウマの背中をさすってくれたおかげなのかだんだん呼吸ができるようになる。

「…………… うっ!?!…………… ツツ!…………… はあ…
はあ」

「ユウマ!」

「だ、大丈夫だ。問題ない」

「ユウマ体調悪いの? なんなら僕がおぶってあげようか?」

ユウマは立ち上がり、拳をぎゅつと握りしめた。

「お前の方が身長低いだろ！ちよつと気になることがある。先に帰っててくれ!!」

ユウマは荒い呼吸を整え、一気に走り出す。何か嫌な予感が、ぐるぐるとユウマの体内で渦巻いていた。

ダンジョン

金稼ぎをするならダンジョンが一番手っ取り早い。怪物を屠り、魔石を換金する。けれどダンジョンにもリスクがある。金を稼げる同時に、死に最も近いこれまで何人もの冒険者がこのダンジョンで怪物に屠られた。女神の恩恵があるからダンジョンに冒険者は潜れるんだが、オレには今恩恵はない。

オレが母さんに追いつく前に、地下にあるダンジョンに潜ってしまったっていた。「おい！母さん！」と叫んでいるがその言葉に返事はなく、そのまま、ダンジョン潜ってしまった。

「見つけた！おい！母さん！」

母さんは奥のルームで、動きを止めていた。一目散にこのダンジョンから出たい。オレだけならまだしも、母さんもいる。しかもオレも母さんも恩恵を持っていない。

オレは母さんを揺らしてみるのが、反応はない。オレは大きな声で呼びかけ、揺さぶるすると突然、目を覚ました。

「……………ここは？家？」

「何やってんだよ！ここダンジョンだぞ！何考えてるんだ！」

「ダン、ジョン？ユウマ？私は何を」

「事情は後で聞く、母さんとりあえずここから早く出よう」

オレが手を引っ張り、奥のルームから出ようとする。するとそれをさせないとばかりか、ダンジョンに亀裂が入る。ビキビキと音を立てて、怪物を産み出す。オレはゴクリと唾を飲み、握ってる手を強く、握りしめた。

そう、これがダンジョンの恐ろしさだと、オレは身に染みてわかることになるだろうと、理解することができた。オレは背中に背負って

いる形見の剣を握りしめて、生き抜くことを決意した。

「ツァー！……はぁ……はぁ……」

「ユウマー！もうやめて！私を置いて逃げて!!」

身体が灼熱の炎で包まれているかのように、燃えている。身体から汗がぶわあと吹き出し、視界を曇らせる。背中も腹も腕もそして顔までが血を流し、顔は苦痛に苦しんでいた。

母親は叫んでいた。ユウマからの返答はない。彼には母親を見捨てて逃げるといふ、選択肢は存在しない。なので彼は眼前の敵だけを見据えていた。彼の背中には母親がいて、後退することは許されない。

数は半分といったところだろうか、だがここまで本気で戦って半分も残っている。まだユウマは諦めてはいないが、どの冒険者が見ても口を揃えているだろう。

「ああ、またダンジョンで死ぬのか」

「くそつたれ！はぁぁぁぁぁあ!!」

力を振り絞り迫ってくるゴブリンをなぎ倒す、余力は残されていないため、技も何もない、ただの素人が剣を振ってるだけ。

後ろから横から、それだけではない上からも攻めてくる。

これがダンジョンか、ユウマの父親死んだダンジョンか、ユウマの父親はいつからだろうか、いつものように行ってきますを聞いてダンジョンに行き、帰ってこなかった。ただそれだけ。母親がギルドに行くこと死んだという。たったそれだけ、それだけの人生でしかなかった。彼の父親は冒険をして死んだのだ。

ゴブリンを切る、斬る、キル！殺す！屠りまくる！ゴブリンが消えていく、致命傷だけは防ぎ、切る、腕が切り刻まれても、斬る、足が

削がれても、キル、内臓が出そうなくらいの一撃を食らっても、殺す。ユウマの戦い方は簡単に言えば、バーサーカー狂戦士そのものだった。

だが数が多い、だんだんユウマの怪物屠つていた手が震えていく、とうとうゴブリンに後ろの壁まで吹き飛ばされる。

「ツツガ……………！」

「ユウマ!!」

肺に入っていた少ない空気が全ていきなり全て出ていく。

母親が近寄り、血だらけのユウマを抱き寄せる。

モンスター怪物は警戒しながら、ユウマに近づいていく。

「お願い目を開けて！ユウマ！」

もうまぶたも開けられないくらい、余力は残っていたくない。もう死を悟りうつすら微笑みながら、幕を終えようとしていた。

「ああ、ごめんなさい母さん、オレはあなたを守ることができなかつた。もっと強くなって、あなたを守っていきたくかった。ごめんなさい。ごめん、父さん」

母親が叫んでいるのが聞こえる。暖かい何かユウマの頬に当たっていく。モンスター怪物の迫ってくる足跡が聞こえる。けど彼は痛みから逃れようと、彼の意識は闇の中に消えて行く。

「もし俺がいなくなったら、お前が母さんを守ってやってくれ、母さんに寂しい思いをさせなよ？」

わかってるよ、わかってんだよ！そんなことは！お前は！なんでそんな言葉をオレに残したんだよ！もう辛いんだよ！

「一回地獄を見ただけでか？」

ああそうさ！地獄は一回見れば十分だ！その一回も耐えきれなかったんだよオレは！もう寝かせてくれ……………

「オレの息子はそんな弱くないだろ？お前はオレの息子だろ？」

「くそつたれが、まだ終われねえ、まだ死ねねえ！オレには守るものがある！約束があるんだあああああッツ!!」

立った、彼は立った。剣を握り、不屈の闘志を燃やし、立ち上がる。狂戦士バースーカいや戦士弱者が立ち上がる。

正面から襲いかかってくるゴブリンを下からの斬りあげで屠る。彼は窮地だから使える祖父から嫌という程教わった技をそして父親から教わった戦い方も混ぜることにした。ゴブリンの血を剣を振り、払い落とす。

「こいよ、虫。今度はオレが狩る番だな」

斬りあげ、回し蹴り、渾身の拳の一撃、回転斬り。頭をフルスロツトル回転させ、最善手を打ちまくる。彼は剣を使うよりも、拳の方が得意だった。剣は一本、右手に持てば左手が余る。その左手で恩恵がないため屠るまでとはいかないがノックバックさせることができる。足もある、頭もある。身体で全て使えるのもは全て使う。それがオレの流の戦い方だった。

「ぐおおおおおおおおおおあツツ!!!」

屠る。屠りまくる。頭は冷静だが、シヨート寸前。口から炎が出るのではないかと錯覚させる。彼の戦いはもうすぐ幕を閉じる。

「……………マ!…………… ユウマ!…………… ユウマ!」

起きると知らない天井。な訳ないか。オレの家だ。

「お母さん! ユウマが起きました!」なんて声を聞きながら、オレは体を起こす。

まだフラフラするがあれだけ傷ついていた。傷がふさがっていた。ポジションか、うちにあるポジションがいくつかなくなっていた。きつと母さんが使ったのだろう。

「ユウマ! よかった! 本当に良かった!! ごめんなさい……………」

「ごめんなさい…………… あなたに辛い思いをさせてしまつてごめんなさい……………」

母さんが涙を流しながら、オレに抱きついてくる。何度も何度もごめんなさいと謝っていた。オレは照れくさかったのか、体はそのままに、言葉は震えていた。

「…………… すまなかつた。素直に謝る。母さん、ベルすまなかつた」

オレは視線を落としながら、母さんとベルに深く謝罪する。涙が出そうだった。母さんの鳴き声と、ベルの泣きそうな顔を見るだけで、涙が出そうな上に、心が痛かった。

母さんから話を聞くと、オレと母さんダンジョンに入ってから三日は経っていた。オレは意識はないが、怪物をオレが全部倒した後、母さんが背負いダンジョンからでて、家まで歩いていたという、その姿

を見たベルはファミリア探しもせずにもオレにつきつきり看病していたと言う。

母さんがダンジョンに入ったことは覚えていないという、そしてオレにあったあの悪寒はなんなのかも、原因は不明だった。考えても答えは出なさそうだった。

母親は「ユウマが目を覚まさなかったらどうしよう!」といつも暇があつたら泣いていたそうだ。

そんな話を聞いてますます反省したオレはすまん、すまんと謝りながら聞いていた。オレがこれからすることはベルとオレのファミリア探しだったが、オレにもう一度冒険ができるのか?とそう思ってしまった。

トラウマを植え付けられたわけではなかった。ただ単純に、オレがダンジョンに戻れば、母さんやベルが悲しむのではないかと思つてしまっている。

母さんはわんわん泣いていたことをいつの間にかやめていて、涙を拭いて立ち上がっていた。

「本当に良かった。……さあ!ご飯にしちやいませよ!ほらほら三日も私のご飯を食べてなかったんでしょ?ユウマが好きなカルボナーラよ!ささっ!ベルもユウマも食べませよ!」

母さんはリビングに向かって歩いていく、オレの中に何かあったかいものが渦巻いていく、そしてそれを教えてくれるかのようにオレに手が伸びてくる。

「ユウマ!次はさ、ユウマだけじゃなくて、僕も連れて行ってね!」
「ベル、オレはさ、今不安なんだよ、ベルを悲しませて、ましてや、最後は母さんを守らずに死のうとしてた。そんなオレがこれからやっていけるの……」

ベルが笑顔でオレの言葉を遮る。

「僕はさ、生まれた頃から両親がいなくて、小さい頃から祖父に育てられてたんだ。おじいちゃんがいつも言ってたんだ。『ベル、あそこにはなんでもある。欲しければいけ、英雄になりたければ行け。お前が望むのがそこにある』ってさ。祖父が死んで、僕はここにきた。ユウ

マと出会ったんだ」

「僕はね、英雄になりたい。つて最初は思ってたんだ。けどね僕気づいたんだ。ユウマが起きない三日間。僕はユウマと一緒に英雄になりたいんだって。だからさ、ユウマ、僕と一緒に冒険してくれないかな？」

ああ、なんて愛くるしいだろう。目頭が熱くなつていく、オレはベルと出会わなかったら、救いがなかったらきつとここで冒険はやめていただろう。けど今のオレにはベル親友がいる。オレは彼に今救われた。ならオレは彼が沈んだ時オレは彼を助けたい。ならば……………。

「ああ、オレと一緒に冒険してくれないか？」

オレとベルの冒険はここから始まる。

【ヘステイア・ファミリア】

オレたちはいつも通りファミリアを探していると、路地裏で迷い、途方に暮れていた。けれどオレたちには一生忘れられない出来事が起こった。

「ねえ、君たち僕の家族ファミリアなつてくれないか？」

そこに黒い髪をツインテールにして、体格に合わないほどの巨乳、そんな神様に会った。

「さあ……ここがボクのホームだぜ！」

神ヘステイアに連れてこられたのは、オンボロ教会。としか言えなかった、ベルなんて顔が引きつってるぞ。

まあ、こんなオンボロ教会なら自分の家でオレは暮らすけどな。

「むっ！君たちこの教会を侮ってはいけないぜ！ここにはまだ秘密があるんだ！」

ヘステイア様はグツツと右手の親指を立て、俺たちに公言した。いやこの教会のものならたかが知れてるんだよなあなんて思いながら面では、いい笑顔でベルと同じように「すごいですね、神様ー」なんて言つとく。

「君はおもつてないだろお!!」とヘステイア様はオレに向かって言葉を飛ばしてくる。

「ほらどうだい？教会の地下は広いだろ？」

いやただ子供の秘密基地としか思えん。ベットやら家具やらいろいろ揃ってるから生活はできるな。

「さあさあ！君たちに僕の恩恵を刻むぜ！服を脱いでくれ」

「え!?!全部ですか!?!」

ベルは驚きながら言うが、絶対上半身だけだろと心の中で思う。「いや、上半身だけでいいよ」なんてヘステイア様が言ってるから、やっぱりそうなんだろうな。

先にベルが服を脱いで、ベットに寝転がる。

さあこれで恩恵を刻む準備が整った。

「さあ、最初はって！ボクはまだ君たちの名前も聞いてないじゃないか!!!」

ベルの腰にまたがって、刻もうとした瞬間へステイア様は叫び出す。たしかにオレたち名前言ってなかったな。ていうか、元気だなこの神様。

「すいません神様まだ自己紹介してませんでしたね。僕はベル・クラネル。そしてこっちの黒い髪の方はユウマ・アルセルドです」

オレまだ自己紹介してくれるなんてありがたい。オレは「よろしくお願ひします」と付け加える。

「ああよろしく。さあ、ベルくん！今日から君はボクのファミリアだ！ボクの恩恵を刻むぜ！」

青白い光がベルを包んでいく、ベルの体に【神聖文字】が刻まれていく。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : I 0 耐久 : I 0 器用 : I 0 敏捷 :

0 魔力 I : 0

《魔法》

□

《スキル》

□

ベルの背中にはいくつもの漆黒の文字が刻まれている。ヘステイア様は紙を【神聖文字】に当て、『ステイタス』を紙にうつす。

「はいベルくん、これが君のステイタスだけ？」

ベルは自分の『ステイタス』を見るとわなわなと震えて、「全部ゼロ？」なんて呟いていた。ヘステイア様がポンポンとベルの肩を叩き、

「これが普通なんだぜ？」なんて呟いていた。

「さあ次はユウマくんの番だ、さあそこに寝るんだ」

「は、はい」

オレは服を脱いで、ベットに横になり【神聖文字】を刻む準備をする。ヘステイア様がオレの腰にまたがる。そしてヘステイア様の細

い指で、オレの背中を撫でる。

ユウマ・アルセルド

L v. 1

力 : I 0 耐久 : I 0 器用 : I 0 敏捷 :

0 魔力 I : 0

耐久 : I

《魔法》

〇

《スキル》

ライカルムフーヴェ

【大切守護】

- ・ 守りたい思いが強ければ強いほど早熟する。
- ・ 守りたい思いが続く限り効果持続。
- ・ 絶望から立ち上がる時、超効果向上。

「うん、これで君の『ステ……ふあああああ!?!?」

ヘステイア様が、転がっていく。え?どうしたんだ?オレのステイタスなんか不備があったのか?

「いや、不備はないけど……不備なのか?いや不備だね!君がもう『スキル』が発現してるなんて!」

「ええええええ!?!」

「う、嘘でしょ!」

「あり得ないだろ」

ベルはオレに一気に近づいてきて、オレはベットから大きく飛び上がる。オレとベルも目を大きく見開き、汗がブワツと出た。

ヘステイアさまは「あり得ないよ!あり得ないだろ!」とか叫びながら、【ヒエロググ神聖文字】をうつした紙を震わせながら、見ていた。

普通初めて恩恵を刻む時、ほとんどの下界の子供達は0から始まる。けれどオレは四日前に、ダンジョンに潜り一度地獄を経験している。きつとそれが影響しているんだろうが、まさかその際にスキルが発現するなんて思ってもいなかった。

「えーっとこれってどうなるの?」

「知らないよ!!どうするんだよ!これ!ユウマくん、君何をしたんだい!」

オレはヘステイア様に三日前に起きた出来事を全て話した。ヘステイア様はふんふん、なんて言っただけ。もう夜は薄暗く、魔石灯が輝いていた。ベルはキツチンを借りてコーヒーなどを作っていた。

「って感じです。すいません隠していて」

「なるほどね。君の話聞いてわかったことがあるよ」

ヘステイア様はコーヒーを一口飲みニッコリ笑った。

「君はとっても優しいね」

「はへ?」

ヘステイア様はオレの顔を胸に埋めた。ヘステイア様の体は柔らかく、とてもいい匂いがした。

神様なら「お前は大切な人を傷つけて恥ずかしくないのか?」と言われるかと思った。

「君は誰かを傷つけさせたくなくて、君は誰かを守りたかったんだねだから君は優しい」

オレの頭を撫でます。その撫でられる心地がとても気持ちよくて、とても暖かかった。

「君は誰かを守りたいならもつと強くならなくちゃね、もつと強くなつて、誰かを守れるぐらい強くならないと」

「何者にも奪われない強さを、まだ誰も辿り着いてない強さを、そんな強さをボクとベルくんと一緒に目指してくれないか?」

オレの目頭が熱くなる。オレについていた鎖みたいなのが全てほどけていくような心地があった。ヘステイア様とベルはにっこり笑ってオレに微笑みかけてくれた。それがなんとも嬉しくて、このファミリアでオレは成長していきたいと改めて思った。

「はい、オレはもつと強くなつて大切なものをもう失わないように頑張ります」

「ああ!今回みたいな無理はダメだぜ?僕はユウマくんもベルくんも一人でもかけたらボクは泣いてしまうぞ」

ヘステイア様はにっこり微笑みながらそんなことを言った。何を

言ってるオレは、オレ達は……………

「大丈夫です神様。オレは（僕は）神様を一人なんかにさせません」
オレはこの「ヘスティア・ファミリア」の眷族として、冒険をしよ
う。

『ブモオオオオオオ!!』

「ほあああああああ!!」

なんで！なんでこんなところにミノタウロスが!?僕はミノタウロ
スに追われている。なぜかと言うと、僕が怪物狩^{モンスター}つっていると、どこか
らともなく現れたミノタウロスが僕を追いかけ回し始めた。

「はあ……………はあ……………はあ……………」

今も息を荒げながら逃げ回る僕と追いかけるミノタウロス。

クソツ！クソツ！なんでだよ！なんでこんなところにミノタウ
ロスが!!こんなところで終わりたくない！

必死に逃げ回る、ミノタウロスの追いかける足音が聞こえる。その
度に僕の心臓は高鳴っていく。

なんでこんな時にユウマはいないのおおおおおっ!?

ベルの悲痛の泣き声が聞こえた気がするが、気のせいかと押し込み
ギルドに向かう。

「あれ？ユウマくん？ダンジョン探索は終わったの？」

「ああ、今終わったところ。ほら換金にきたぞー」

オレは探索が終わり、魔石を換金しにくる。

「ほら6000ヴァリスな」

「どうも」

オレはヴァリスを受け取り、自分の小袋に入れる。

「あれ？今日は結構稼いだんだね？ベルくんがいらないけどどうしたの
？」

「オレとベルは今日は別行動。ベルが「ちよつと今うちのファミリア
金欠だから僕に構わずお金を稼いできて」って言ってきたからオレは
ベルより下の階層行っただけ」

するとエイナさんは身を乗りだし、オレに顔を近づけてきた。ちょい近い近い！あまりの近さにオレの心臓は高鳴り出す。ま、まあ、エイナさんめっちゃ可愛いし、エルフだからめっちゃ好みなんだけど、ちよつと順序つてもものが！

「今日は何階層まで潜ったの？」

「へ？」

「こ・た・え・てー！」

「は、はあひい」

ギルドの脇にある、ソファに腰掛け、エイナさんと話していた。エイナさんの顔は笑顔だが目が笑ってない。エイナさんは心配性すぎるのではないだろうか？

オレたちがダンジョンに初めて行く時なんか、俺たちに上層モンスターの特徴とか覚えるまで行かせてくれなかったからね。ほんと辛かった。

「ええーとですね。オレは7階層まで……………」

「そうなんだ7階層ね…………… はあああああああ!？」

「うおおおおおお!？」

エイナさんがオレに掴みかかって、オレを前後に揺らす。や、やめて！脳が揺れる脳が！

「君はまだ冒険者になつたばかりだよね!?!なんで君はもう7階層なんかにいるのかな!?!」

「い、いやオレ上の怪物は弱すぎたんで7階層くらいなら一人でいけるかな〜なんて?」

「む・り・に！に決まってるでしょ!!なんで君は7階層なんかに!いつも言ってるでしょ? 『冒険者は冒険しちやいけない』って」

「で、でもそれは…………… 「エイナさああああああんっつ!……………ん?」

オレの言葉を遮るかなように、大きな声がギルドに、いやギルド付近に響き渡る。

声が聞こえた入り口付近をエイナさんと見てみると、血だらけになつたベルだつた。

「うわあああああああああ!？」

「うおおおおおおおおお!？」

「アイズ・ヴァレンシユタインさんの情報をおしえてくださああああいっ!？」

「ダメじゃないベルくん、そんな血だらけになったならシャワーくらい浴びないと」

体を洗ってさっぱりした僕の前でこれみよがしにため息をついた。ギルド本部のロビーに設けられた小さな一室。今、僕とエイナさんはテーブルを挟んでお互いの椅子に座っていた。

ユウマは僕の隣に座って何やってんだ?みたいな目で僕を見ている。

「で?ミノタウロスに5階層で追いかけて、アイズ・ヴァレンシユタイン氏に助けられたってこと?」

僕はミノタウロスに遭^{エンカウント}遇して、逃げた末に、行き止まり。絶体絶命と思いきや、まさかのアイズ・ヴァレンシユタインさんがミノタウロスを倒して、助けてくれた。けど僕はお礼を言うどころか、羞恥心と緊張で逃げ出してしまった。

「で、なんでそのアイズなんちゃらさんって言う人の情報が欲しいんだよ?」

「アイズ・ヴァレンシユタインさんね、ユウマくん。あのLv5の【剣姫】と謳われてる冒険者の中でもトップクラス中のトップクラスの冒険者って知らないの?」

エイナさんはユウマの瞳に焦点を合わせる。じつと見つめられて少し照れているのか、ユウマはそれを誤魔化すように咳払いをして、話題の先に行った。

「で?そのヴァレンシユタインさんにお近づきになりたいってことか?てことはベル、ヴァレンシユタインさんのこと好きになったのか?」

「そ、そんな直球に聞かないですよ!」

「ベルくん、凶星なんだねえ?」

「うっ！は、はい……………」

僕は羞恥心に見舞われて、顔を真っ赤にして俯く。

そしてここから僕のヴァレンシユタインさんへの質問が始まるが、そこまで収穫を得られずに、夕方になっていく。

「次からは気をつけるんだよ、二人とも私が許した階層しか言っちゃダメなんだからね?」

「は、はい」

「よろしいーじゃあねユウマくん、ベルくん」

エイナさんは小ぶりに手を振りながら笑顔で見送ってくれた。僕は神さまが待っているだろう教会へ向かう。エイナさんに僕とユウマは手を振ったら僕は駆け出した。

アイズ・ヴァレンシユタインさんと出会ってから数時間しか経っていないが、今僕に映る全てが美しい光景に見えた。僕は神様がいるホームへ歩き出した。

「あれ?こっちくるの遅かったね?」

僕が歩いていると駆け足でユウマが走って来た。少しの間僕が一人で街を歩いていたらそんな疑問を投げかけてみた。

「ん?ああ、ちよつとエイナさんと話しててな」

(はあ、なんであんなこと言われてちよつと喜んでるんだろ)

時はほんの少しだけ戻り数分前、ベルが駆け出した後。ユウマはエイナのところに行き、こんなことを言っていた。

「エイナさん」

「あれ?ユウマくん?どうかした?」

「オレエイナさんを残して死にませんから、絶対生きて帰ります。それを伝えるにきました。エイナさん、また明日」

ユウマはエイナの元から離れていき、ベルの元へ走って行く。ユウマはベルに追いつくと、ユウマとベルは笑い合いながら夕日に照らされながら、帰っていく。

エイナの『冒険者は冒険してはいけない』という言葉、エイナにはユウマがスキルが発現していることはエイナは知らない。それは主

神のヘステイア様に止められているから彼は誰にも話せない。エイナは冒険者になった駆け出しでLv. 1の彼が7階層を探索していることを心配している。ユウマはエイナを安心させるために呟いた言葉である。

エイナは少し羨ましいと思ってしまった。誰かと笑い合い、誰かと共有する。そんなことはエイナもよくしていることだった。ギルドには友達はいるし、笑って仕事をしているつもり、けれどなぜか羨ましかった。そしてちよっぴり嬉しい。

【もつと強くなりたい】

「ベルくん・ユウマくん！お帰り〜!!」

オレ達がホームに戻ると、ヘステイア様はオレとベルに抱きつき、オレ達の帰りを祝福した。

「ただいまです神様」

「ただいま帰りました」

「大丈夫かい？怪我とかしてないかい？ボクは君たちに死なれてしまったら悲しむよ」

オレの体をベタベタ触り、怪我のチェックが入る。オレの体には今日もらったお金と背中につけている剣しかない。怪我也少しはしているが、そこまで痛くない。耐久上がったならいいだろうと思いつながらヘステイア様のチェックを受ける。

「ベルはミノタウロスに殺されかけて、血だらけになったけどな」

「え!?!大丈夫なのか!?!」

ヘステイア様のチェックがオレからベルに移行される。オレはフツと息を吐き、台所をかりる。今日の料理の魚料理考えながら今日買った食材を台所に出す。

「あ、ユウマくん。ご飯作る前にステイタス更新しようか」

「あ、はい」

オレは一時中断して、ヘステイア様の寝室へ向かう。ベルも寝室にある椅子に座り終始ニコニコしていた。あーヴァレンさんと会ってテンション高いのか。

「さあ、今日はどっちからにする?」

「ベルからでいいですよ、オレやっぱりベル更新してる間になんか作るときますね」

オレはそのままキッチンに向かい料理を始める。ああ、魚が少し焦げてる。この焦げてるやつはヘステイア様の分にしよう。

「ほい、ステイタス更新終わり。じゃあ次ユウマくんの番だよ」

「ほーい、今行きますよーっと」

オレは一通り料理し終わったものを皿に並べようとしたが、時間が足りず断念。はあとため息ついているベルにバトンタッチしてあとは任せる。

「更新させながら聞いてくれるかい？」

「あ、はい」

ベットに寝転がり、ヘステイア様は自分の指に針を刺し、滲み出るその血を、そっとオレに滴り落とす。

皮膚に落ちた血は波紋を広げ、オレの背中に染み込まさせる。

ヘステイア様はオレに一枚の紙を渡してくる。ベルのステイタスだ。

「君にだから見せるよ、ちよつと見てくれないか？」

ベル・クラネル

L v. 1

力 : I 82 耐久 : I 13 器用 : I 96 敏捷

: H 172 魔力 I : 0

《魔法》

□

《スキル》

【憧憬一途】
リアリスフレゼ

- ・ 早熟する。
- ・ 懸想おもいが続く限り効果持続。
- ・ 懸想おもいの丈により効果向上。

「え!?!これって!」

「しいいいい!声大きいよ!」

「す、すいません」

慌てて口を押さえて、謝る。これってあのヴァレンさんと会ったからだよね?運命的な出会いをしたから発現したとかかな?

「ベルくんがボクの手以外で変わってしまったなんて悲しいよ!君はボクの手以外で変わらないよね?なあ!ユウマくん!」

「ち、近いですよ。ヘステイア様」

グインと顔を近づけ、オレによく見せてくる。ちよつと怖いよこの

人。愛が重いのかな？いや子供達に向ける愛が重い神とかいるらしいし、ほら【アポロン・ファミリア】とか有名だし。

「ほら、君のも終わったぜ？まあ、君のステイタスも駆け出しの癖なのに化け物だけどね〜」

ヘステイア様はオレにコイネー共通語に書き換えてある用紙を受け取る。

ユウマ・アルセルド

Lv. 1

力 : H 187 ↓ G 201 耐久 : H 120 ↓ H 14

5 器用 : G 243 ↓ F 300 敏捷 : H 199 ↓ G

229 魔力 I : 0

《魔法》

□

《スキル》

ライカラムノーヴェ

【大切守護】

- ・ 守りたい思いが強ければ強いほど早熟する。
- ・ 守りたい思いが続く限り効果持続。
- ・ 絶望から立ち上がる時、超効果向上。

オレの【ステイタス】普通の冒険者からしたらすごい成長速度だな。
おもい懸想を心の奥底から強く、思ってるけど、これがオレの成長速度の限界みたいだな。

他の人よりも成長速度は速く上がってるはずだから、文句は言えない。3つ目にある、絶望から立ち上がると『超』効果向上ってところがベルとは違うみたいだな。絶望から立ち上がると、これよりも成長速度上がるのかと思うと、ドキドキしてしまった。

「ふふん、どうだ君はボクの偉大な話を聞いてから発現した超レアスキルだぞ！ユウマくん、そんなにボクのが好きだったのかいい？」

ヘステイア様はふふんとオレをからかうように、言ってきた。

「うーん、はい好きですよ」

「なんだいなんだい！君もベルくんもひどいや！ボクがこんなに愛してやまないというのに！」

ヘステイア様はブンブン怒りながら、リビングに向かっていく。確かにこのスキルはヘステイア様の眷属になった時に発現したもののだが、別にヘステイア様は関係ないような……………。

まあ、この『スキル』のおかげでなかなか早い成長速度で上がって行く。一人では少しきついですが、オレには戦い方の技術があるので、7階層くらいなら一人でも余裕で帰ってこれるレベルに成長した。

オレは自分のステイタスを見ながら、ベルのステイタスと見比べる。【リアリスフレゼ憧憬一途】か【ライカラムフーヴェ守護大切】どっちが上か勝負だな、ベル。

ヘステイア様が「うわああああ!!どうしてボクの魚だけ焦げてるんだあああつ!!」と叫んだのはまた別の話。

「ほらベル、コボルトが出たぞ。勝ってさっさと魔石集めんぞ」

「む、無茶言わないでよおおおおつ!!」

『『『『ガアアアッ!』』』』』

次の日ダンジョンでオレたちは一階層にいた。今回はミノタウロスの残党がいるかもしれないのでベルの特訓ついでに、一緒にいる。

ベルは遭エンカウント遇したコボルト六匹に追いかけられるはめになっていた。ダンジョンは迷路闇雲に動くとうこともある。なのでベルがコボルトに追われてる後ろにオレも距離を取り追いかけていた、二股道、十字路、緩やかな下り坂をベルは腕を大きく振って逃げている。「おーい、逃げてるばっかじゃ強くなれないぞ、アイズ・ヴァレンシユタインさんに嫌われちゃうぞ」

ベルの肩が逃げながらもピクリと動く、ベルは何か決めたようにその場で止まる。おいおい、そんなところで止まるとコボルトにやられるぞ。

そしてベルはコボルトの体当たり攻撃を真正面から受けた。

「グッツ!!」

「ベル!!」

ベルはくの字に曲がり、大きく吹っ飛んでいく。ベルはすぐさま立ち上がり、自分の持っている小振りの短刀を取り出す。

ベルがやけになって正面から立ち向かうのかと思いきや、オレは愛剣を

取り出しコボルトに斬りかかろうとする。オレはやけになると危ないということを経験していた。このままじゃベルが危ないと思いオレの危機能力が発動した行動だ。

「ユウマ、手を出さないで」

「ッ!？」

オレは攻撃しようとした手を止め一歩下がる。ベルの真剣な眼差しを見てオレは、ああ、ベルは男してるなって少し笑ってしまった。この戦いをオレはゆっくりと見守ろう。

僕はユウマの戦いを何回も見ている。どんな時も冷静でいることがそれが戦闘のコツだと彼は言っていた。頭は冷静に、身体は剣のように。

小振りのナイフを右手に装備しコボルトが来るのを構える。まず1匹仕留める！

「はあああああっつ!!」

『キャウン!?!』

僕の特攻で、コボルト心臓に僕のナイフが刺さる、そのままナイフを引っこ抜き、コボルトの死骸を投げつける。怪物は死滅モンスターした後黒い煙となって消える。だけど数秒間だけは死滅しても、原型をとどめる。そのあと数秒後に、煙となって消える。僕はその目くらましにコボルトを使い、黒い煙で一瞬動揺したところで、追撃をかける。

「ベル、どんな武器にもメリットとデメリットがある」

「うん、それはなんとなくわかる」

僕はコボルトと遭エンカウント遇する前に、ユウマに指導してもらっていた。ユウマは自分のナイフを取り出し、目の前にゴブリンをターゲットにした。

「いいか？まずナイフのメリットは……………フツツツ!!」

『ギイヤアア!?!』

ユウマは敏捷に任せてゴブリンに突撃する。ゴブリンはユウマの敏捷に反応できずに首を刈り取られる。ゴブリンの首が飛んで、その

ままごろつと首が転がり、魔石を残して消える。

「敏捷を丸々使えることだ」

自分のナイフを上投げ、キャッチする。僕はユウマの言ってることが理解できなかった。

「えつと、つまりどういうこと？」

「大剣とかハンマーとか、ましてや剣だって重さというものがある。しかしナイフには重さがないっていうのがメリットだな」

「うん、なるほどね」

ユウマは後ろいたゴブリンを僕に説明しながら上へ飛び、後ろ回り蹴り、そのままナイフを投擲、心臓にあたってゴブリンは死滅。

「あとは神様用語でいうならトリツキーな動き方ができるかな」

「とりつきー？」

「ああ、今みたいに、投擲をしたり、斬りかかると見せかけて殴るとかな」

「うーん、僕にはまだできそうにないなあ」

ユウマの動きはすごい動きが多い、初心者僕にもわかるくらいにすごい動きが、けどユウマはその動きを何年も鍛錬してきたからできるもので僕が半月で覚えるなんて無理難題な気がする。

それを顔で察知したのか、ユウマはフツと唇をあげて笑う。

「大丈夫だ、オレが一応教えてやるから技術的なことは」

「うん！ありがとうユウマ！」

「お礼はいいから、ほら次はデメリットの話だ」

ユウマはナイフを刃の部分の逆に出し右手の五本指で強く握る。そのまま風を切る音がして右から左に流す。これがデメリット？ナイフが早かったからデメリットとは思えないんだけど。

「リーチが短い」

ユウマは自分の愛剣を取り出し比較を出してくれる。たしかに武器としては一番リーチが短いと言える。

「そっか！だから相手の懐に入らないといけないってわけだね？」

「そう、リーチが短いから相手が大剣ならリーチで圧倒的に負ける。だから相手の懐に入って攻撃しないといけない」

「そう言われると、ナイフって不利なのかな？」

僕は少し不安でユウマに聞いてみる。リーチが短いから相手の初撃を食らう可能性が高いということ。それを躲して相手の懐に潜り込めるかどうかと聞かれれば、答えは無理と答える。

僕は自分のナイフ見つめて、シュツ、シュツと右から左へ、左から右へ動かす。

「まあそれを補うのが、『技と駆け引き』ってやつなんだがそれはまた今度な、ほら怪物来たぞ」
モンスター

僕はナイフをギュと握りしめて、コボルトと向き合う。

「フツッ!!」

『キャインツ!?!』

黒い煙で動揺した、コボルトたち2匹を同時に首を裂く。

この武器はリーチが短いなら、これでどうだ!

「だあああっ!!」

『ブボオツ!?!』

僕はそのままナイフを飛びかかって来た、コボルトの心臓めがけて投擲するが、うまく当たるはずもなく、顔にあたり、転がってゆく。まずい、武器がない。ユウマは助けてはくれない。そんな甘えは僕が許さないからだ。

『ギャオオオ!!』

コボルトがここぞとばかりに攻めてくる。あと三匹倒せば僕の勝ちだ、ナイフを取りに行く時間もない、しかも三匹同時に攻めて来るから狭い通路であるこの道で、通り抜けることはできない。なら僕がとる行動は!!

「うおおおおおおおッツ!!」

「ベル!?!」

襲いかかってくるコボルトは僕に向けて飛びかかってくる、けれど僕はコボルトよりも高く舞い上がる。

『キャウンツ!?!』

そのまま飛び蹴りを脳天にかます、自分でもわかる弱点攻撃クリーンヒットしたの

がわかり、煙となって消える。そのまま落ちてるナイフを素早く拾い、ナイフで斬り上げ、腹部を裂いて、死滅。残り一匹。

『グルルルルル!!』

距離は遠い、なら投擲!

『キャウンツ?!』

額に刺さり、黒い煙となって消えていく。魔石が落ち、その横で腰が抜け、ぺたりと座り込む。

「か、勝てたあ………」

「カツコよかったぜ!ベル!」

ユウマは親指をグツとあげて、僕を褒めてくれる。ここまでの意地は僕にとっても初めてで、負けたくないって気持ちがたくさん芽生えた。

「ありがとう、ユウマ僕なんか成長できた気がするよ」

「そうか、なら」

ユウマはそこまで言うどグツとあげていた親指を自分の後ろの方にさし、クイツ、クイツと前後させた。僕は頭を左にずらし奥を覗く。「オレが引き連れてきた、ゴブリンもよろしくな!後は任せただぞ!ざっと見た感じ十五匹ぐらいあるからよろしくな!」

「ちよつとおおおおおおおお!!?」

僕の戦いはまだ終わらないみたいだ。

【奮闘】

「ひどいよユウマ」

「すまんすまん、豊穰の女主人で奢ってやるから許してくれ」

オレらはぐったりとしたベルと一緒にあるお店に向かっていた。あのあとベルは十五匹のゴブリンを倒し、そのままぶっ倒れて、ギルドで看病して、起きたのでそのまま向かっている感じだ。

豊穰の女主人、オレと母さんの行きつけで、かつて死んだ父さんもよく行っていた。半月ぶりなので少し緊張しているが、ぐったりとしたベルを元氣付けるならここがいいだろう。

「ここだ、ベル」

「うわあ、酒場だあ」

ベルは酒場というものが見たことないのか、うわあって言って感動していた。何年も通ってるからわかるけど、やっぱり変わってないなこの店も。早く建て替えればいいのに。

オレが先頭で入っていく、入っていくと緑のエプロンをつけさせかかと忙しそうに働く女の子たちがたくさんいた。もちろんオレはみんな顔見知りだ。

この店では、冒険者たちが談笑に花を咲かせ、高笑いしている意味で騒がしいお店だ。ベルはそんな光景が珍しいのか、驚きながらお店を回る。オレは父さんに初めて連れてこられたオレをベルに重ねてしまう。

そんな微笑みながらお店に入ると、緑のエプロンをきた店員がご案内に来る。

「いらっしやい……って!?ユウマじゃニヤいかニヤ!?!」

「こんばんはアーニヤさん。お久しぶりです」

「半月どこ言っていたニヤ!あれほど金を落とせと言ったじゃニヤいか!」

「結局金かよ!」

アーニヤさんも相変わらずだな、と思い少し微笑んでしまう。アーニヤさんはオレが始めて来た頃から、働いていた店員さんだ。

ベルは先にカウンターに座っていてもらっていて、ミア母さんと今朝にあったシルと一緒にいて、次々と出る料理に圧倒されていた。

最初もオレも驚きまくったからね。

「あれ？ユウマじゃん！久しぶり！元気にしてた？」

「ルノアさんもお久しぶりです」

ルノアさんがオレの方をポンポン叩く、オレは久しぶりに見るみんながいるからとても幸せな気分だった。

「ニャー！少年ニャー！元気にお尻は育ったかニャ？グへへへへへ」

「クロエさん、相変わらず変わってないですね」

変態のように手を開いたり、閉じたりしてオレに視線を向けていた。

「ほらユウマ、そこで連れの方が待っているでしょう、さっさと座ってあげなさい」

「あ、リユーさん」

リユーさんがオレに声をかける。リユーさんはこの中で一番後に入った人物で、オレも15歳くらいの時に通った時は店員らしからぬ表情で、接客業をしていたが今となっては少し板についてきたみたいだ。

「ベル、待たせたな」

「う、うん。………ここすごいね」

オレはベルのカウンターの横に座り、ベルが食べていた。料理をオレも食べ始める。ベルはシルさんやミア母さんにやっぱり圧倒されてるらしく、ベルは料理をゆっくり食べ始めていた。

「ユウマさん、こんにちは」

「こんばんは、だろシル、久しぶりだな」

「はい、私ユウマさんがいなくて寂しかったんですよ？」

「はいはい、金を落とさなくて悪うござんした」

「ひどい！そんなこと私言ってないのに！」

シルはわざとらしくヨヨヨと、泣くふりをする。彼女がこういう性格をしているのは知っているし、慣れてもある。まあ長年の付き合いで、長く通ってるうちにオレがそういう対応をシルにしてしまっ

る。

突如、どつと数十人規模の団体が酒場に入店してきた。あらかじめ予約していたのか、オレ達の対角線上の、ぼつかりと空いた席の一角に案内される。オレとベルは団体客は誰だろうと見てみると、そこにいたのは「ロキ・ファミリア」の方達だった。その中に確かにいた、オレが憧れを抱いて止まらないあの人が、紛れ込んでいた。

リヴェリア・リヨス・アールヴさん……………！

オレはアールヴさんを不躰にみるのは良くないと思い、前を向くと、ベルはオレの隣で顔を赤くして、ううつとカウンターに突っ伏していた。ああ、ヴァレンさんって確か「ロキ・ファミリア」だっけ？アールヴさんのことしか見てこなかったから、あんまり興味なかったんだよな。

「よつしやあ、ダンジョン遠征みんなご苦労さん！今日は宴や！思う存分飲めえ!!」

そこから「ロキ・ファミリア」は騒ぎ出す。料理と酒を豪快に口の中へ運ぶ。

「ロキ・ファミリア」の方がここによく来るのは知っていた。オレはその人達よりもこの、豊穡の女主人に通っている。この方達は、ダンジョン遠征の終わった時や、普通に趣味で来ていたりすることは知っていた。

「ロキ・ファミリア」の人たちがダンジョン遠征が終わったことは知っていたから、もしかしたらこの日くらいに来るかもしれないなんてことは思っていない。アールヴさんに会いたかったとかそんなことも思っていない。

「そうだ、アイズ！お前のあの時の話聞かせてやれよ！」

「あの話？……………」

「ロキ・ファミリア」である、獣人の青年がお酒を煽りながら、気持ちよさそうに喋っていた。この人物をオレは知っていた。Lv. 5の第一級冒険者であるベート・ローガ。よく冒険者から恨まれていて、かげ口みみたいな言葉がオレの耳に届いていた。

「あれだって、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス！最後の一匹、お

前が5階層で始末しただろ？そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」

オレはその話を聞いて、すぐにわかった。5階層でミノタウロスにやられそうになって、憧憬となる人物に助けられることを、本人から聞いていた。そう——ベルのことだ。

「ミノタウロスって、17階層で襲いかかってきて、返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出していった？」

「それぞれ！奇跡みてえにどんだん上層に行きやがってよ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！」

この続きをなんと言うのか理解していた。ここで止めるべきなんだろうか、そんなことすれば、L.V. 5の人物にオレが襲いかかってきたとしても、一撃で店の外まで吹っ飛ばされで、気絶して終わりだろう。そのことを頭で理解していたのか、オレは動けなかった。

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しっていうようなひよろくせえ冒険者が！」

「腹抱えて笑ったぜ、兎みたいに壁際に追い込まれて、可哀想なくらい震え上がってよ！顔を引きつらせてやんの！」

オレは歯をギリギリと音が立つくらい食いしばっていた。

「それで、その冒険者どうしたん？助かったん？」

「アイズが間一髪でミノを細切れにしてやったんだよ、なっ？」

「……………」

「そいつ、あのくっせー牛の血を全身に浴びて、真っ赤なトマトみみたいになっちまったんだよ！くっくっ、ひーっ、腹いてえ……………」

その笑い声を聞くだけで、神経と脳がブチ切れそうだった。オレを救ってくれたベル親友を馬鹿にする、あのベート・ローガの声に神経を逆撫でされている気分だった。

「それでだぜ？そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちゃまっつて……………ぶくくっ！うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんの！」

その言葉を終えた瞬間、周りにいた団員が笑い出す。今すぐにも、飛び出したかった、「おい、いい加減にしろよ！」って叫び出したかつ

た。けど動けなかった、ベルのために何かしてあげたかった。

オレの不甲斐なさに、体が動かず、頭が空っぽになっていく、さっきまで聞いていたベート・ローガの声も、他の団員の声も素通りしていく。

声が素通りしていく間にも、話は続いていく、オレは素通りしていく声の中で、ベート・ローガのある単語がオレの中に素通りせずに、大きく残った。

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

オレがその言葉に目を大きく見開いた。そのあと、ベルが椅子を飛ばして、立ち上がる。ベルはそのまま外へと飛び出していく。オレはそれを止めることもできずに、見逃す。けれど一番見逃せないことがあった。オレは火照りきった身体が動き始める。

「お前！いい加減にしろよ！」

「ああ？誰だテメエ」

オレは気づくとそんな言葉を出していた。オレが今どんな顔をしているのか、全く見当がつかなかったが、店の中が静寂に積まれる。

「オレはユウマ・アルセルドだ。さっきお前が馬鹿にしてた、トマト野郎の友達だ」

「はっ！お前トマト野郎の友達か！くっ、ははははははははっ！これは傑作だぜ！お友達を馬鹿にされて、自分がした愚かな行為を気付かず感情に任せて、やっちゃったな！お前！」

ここから、ベート・ローガの雰囲気が変わる、自分の髪を右手でかき上げ、殺気を持った瞳をオレに向ける。

「覚悟はできてんだろうな？」

「ツツ!？」

「俺が誰か知らねえとは、言わせえねえ、もし本当に知らなかったとしても、実力も見極められねえ己自身を恨むんだな」

「お前が何者なのかも知っている、お前がオレよりも強いことも身体で理解している」

「ハッ！そのことがわかっておきながら、テメエは俺の前に出てきたのか？」

「ああ」

【ロキ・ファミリア】の団員は口を閉じ、こちらを見つめていた。オレは今後悔も、恐怖も感じてはいない。これでオレが無様にやられたとしても、いいと思っっている。このまま何もできずに帰っていたらオレは自分自身をひどく恨んでいた。

「じゃあ表でろ、覚悟はできてんだろうな」

「ベート、貴様は自分より弱い人物に喧嘩売って恥ずかしくないのか？」

「黙れ、ババア！アイツが最初に喧嘩売ってきたんだ、オレが表に誘って、何が悪い」

「ベート、君は少し落ち着くべきだ。多分君は酔いが覚めたらきつと後悔するよ？」

「俺は後悔なんてしねえよ、フィン」

団員が口々に、ベート・ローガを止める。それはオレが弱者である証拠であった。オレはそんな事実は本当にどうでもよかった。ただベルをバカにされたことで頭がいっぱいだった。

団員達をまた沈黙にしたのは、またしてもオレだった。

「ベート・ローガ、早く表に出ろよ」

「殺されてもテメエを恨めよ」

「オレは駆け出しの冒険者をそんな風にいうお前が許せない。誰もが通る道だ、それを酒の肴にする必要はなかっただろ」

「ハッ、そんなことでキレてんのかよ、雑魚を雑魚と言って何が悪い、誰もが通る道？笑わせんな。誰もが通る道なら酒の肴にしちやいけねえのか？」

外はオレには暑く感じた、それとも自分が熱くなっているのか自分では分からなかったが、たった一言いえる。

「熱い」

「あア？」

今ベート・ローガに何言っても、無駄な気がする。そして逆もしかり、オレに何を言われようがもう止まらない。ここで、蹂躪されること^{モンスター}がわかつてる、ここで怪物のように屠られることもわかっている。けれどももうオレは止まらない。

オレは地面のアスファルトを砕きながら、爆走した。

「うおおおおおおおああ!!」

「馬鹿が！」

ユウマはベートに飛びかかる、そのままベートに拳を顔面にもらい吹っ飛んでいく、けどユウマは諦めない、ベートの一撃をもらっただけで意識がそのまま吹っ飛びそうになる。

この拳が本気じゃないとわかっていてもLv. 差というのは大きい。吹っ飛び、突っ込み、殴られ、突っ込み、鼻血を出しても、突っ込む。5度目吹っ飛んだ時、ユウマは鼻血をぬぐい、冷静になる。

(思い出せ、オレは今まで鍛錬してきたんだ。その技術を使わずにどうやって勝つんだオレは)

ユウマが6度目の勝負を挑む時、彼は歩いた。ベートの周りを今まで食らってきた間合いを計算し、自分が反応できる間合いのギリギリを図る。

「お前が今更何企んだところで結果は変わらねえ！」

ベートが間合いを詰めてくる。ユウマは即座に反応し、一步引くのではなく、飛びかかる。

ベートは一瞬の不意を突かれ、拳を素早く出す。それをユウマは勘で右にかわす、ユウマの左ほほには少しかすっただけだが、赤い色の液体が滲み出る。

そのまま、顔面めがけて右拳を突き出すが、ベートは軽々しく左手で弾く、ここで団員達もベートもここで勝負は決したと思った。だが一人諦めてない人物がいた。

(ここで無様に負けてもいい！けど一発こいつを殴る!!)

「はあああああああああ!!」

弾かれた右拳を捨て、弾かれた威力を生かして左足の回し蹴り、それも右手で塞がれる。

「まだ!!」

弾かれて、素早く着地してしやがんで右拳で顎^{アツパー}を狙う。それも後ろに一步下がりがかわされる。

「まだ!!」

左足の後ろ回し蹴り、防がれる、そのまま右足でかかと落とし、防がれる、顔面めがけた拳、カウンターを食らう。ユウマは諦めない、決して諦めない、一発殴るその想いだけをのせて強者に立ち向かう。

「クソが、テメエそろそろ諦めやがれ!!もう遊びはしまいだあああ
あっ!」

「ツツ!」

ベートの蹴りを間一髪で躲す、だがベートの蹴りが絶大すぎたゆえか、この場所は整備されていたが、紛争地帯と化したのでそこらへんに瓦礫が落ちている。ベートの蹴りで、後ろにいたリヴェリアの方角へ瓦礫が飛んで行く。

「リヴェリア様!!」

団員の誰かが叫んだ声が聞こえた。その声を聞き、ユウマは唇を切りながらも、爆走する。地面の瓦礫を粉碎し、飛んで行く。リヴェリアはLv. 6そんな瓦礫が飛んできたところで防げる。だがユウマにはその考えに至ることがなく、体が守りたいという気持ちに心を震わされた。

「馬鹿者!!」

「ツツハ……………!!」

ユウマは自らその瓦礫に自ら体当たりし、そのまま口からゴポオと血を吐きながら意識を落とす。リヴェリアがユウマを止め、声をかけるが、それも遅くユウマが倒れる様を見ていた。

「フィン、あとは私に任せてもらおう、先に帰っていてくれ」

「…………… わかった。みんなホームに帰ろう」

さつきまで大所帯だった「ロキ・ファミリア」の面々が消え、ベ

トはガレスに髪の毛を掴まれ、「お前は後で説教じゃ」「離せ！クソジジイイイ!!」と叫んでいた。

ずっとあの戦いを見ていた、【豊穰の女主人】の連中も駆け寄ろうとするが、リヴェリアがユウマを背中に背負い、「私に任せくれないか？」と頼み、ミア母さんは「私の顧客に変なことするんじゃないよ」と告げ、みんな中で入っていく。

リヴェリアはその様子を見送った後、後ろを振り向き、今も辛そうに意識を落としている彼の顔を見つめた後、「嬉しかったぞ」と呟いた。

【魔法発現】

「彼は一体何者なんだい？」

小人族の英雄フィンはつぶやく。「ロキ・ファミリア」はリヴェリアを置いてホームへ帰還している。いつものように馬鹿騒ぎしているファミリアが静まり、先ほどの戦いを皆考えていた。

「んー、よくわからないけど、強かったねー！」

「そうね、確かに私たちよりはLvは下だけど、彼には技があったわね。ま！団長には及ばないけど！」

「うん、強かった」

ティオナ・ヒリュテ、ティオネ・ヒリュテ、アイズ・ヴァレンシユタインが答える。ティオナは先ほどの戦いを見て興奮しながら、ティオネは若干興奮しながら答える。

アイズはというと、先ほどの白い髪をして、少ししか見えなかったが、確かにあの服を着た冒険者を助けた覚えがあった。その子をアイズのせいではないが、アイズは責任を感じずにはいられなかった。そのためアイズはとてもなんとも言えない感情に包まれていた。

「彼は推定するにLv. 1? いやLv. 2なのかな？」

「んー…………… それよりもあの技は僕もどこかで見たことが……………」

「団長、あんな戦い方をする人見たことあるんですか？」

あんな武術を大きく知っていて、危機感知能力も高い。そんな人物がもう一人見たことあるなんて、ティオネは思えなかった。

「んー確かいたような気がする。実際には見たことないけど、噂程度で聞いた気が……………」

フィンは手を顎にやり、考えていた。

「あの子さ！ベート相手なのに頑張ってたよね！」

「うん、一歩も引いてなかった」

ティオナは先ほどの戦いを思い出し、うわあとなぜか歓喜している。確かにベートはオラリオにいる冒険者の中でもトップ中のトップ、その彼に喧嘩を売って、三分も戦えたことはすごい奇跡的なこと

だ。

もちろんベートが最初から本気を出し、殺す気でかかれれば三分ではなく三秒でケリがついただろう。ベートは酒が入ってるとしても、闘いと戦いの区別くらいはついている。

彼はベートに黒い髪を振り乱し、少年から青年へ成長も間近といったくらいの顔で、タンザナイト碧色の瞳を輝かせ、強者に立ち向かっていた。

「確かあんな子、デナトウス神会で見たことないわ、もしかしたらアイズたんよ、ランクアップしとんのか？ いやいや、そんなことありえへん！ うちのアイズたんが一番やあああつ!!」

あの一部始終を見たロキが小さい声で、わなわなと震えながら答えていたが、だんだん不安を押しつけるように大きな声で喋り出す。そして「アイズたんーん！」と言つて飛びつくが、「ぶへぼお！」と声とともに倒れていく。

「彼は強くなりそうかい？ アイズ」

「うん、きつと強くなる」

アイズはロキを吹っ飛ばした後、リヴェリアに連れていかれた、青年を思い浮かべる。そしてそのイメージは消え、先ほど傷つけてしまった。ルベライト深紅の少年を思い出す。

(私も勇気を持って謝らないと)

青年とベートとの戦いは、アイズに勇気を与えた。満月が輝き、アイズの腰までまっすぐ伸びる金髪と金色の瞳がより輝く。

いま、オレは夢で怖いなにかに追われていた。

夢と認識できたのは、そう感じ取れたとしかいえない。

その怖いものとは黒くて、禍々しいオーラを放ち、そいつは禍々しいオーラに覆われていて、輪郭すらわからない。けれどそいつは、オレよりも大きく、オレなんて息をフツと吹いただけで消し飛ぶほどの存在。それを見た時、オレは人類が倒すべき存在である黒龍をオレは思い出す。

オレは恐怖でおかしくなりそうだった。夢でも怖いものは怖い。もしこれが現実で起きていたら、オレは気絶していたかもしれない。

それくらい恐ろしいものだった。

もしかしたら、今後の未来こんな奴と闘うのかもしれない。オレは恐怖に耐えきれず走り出す。その漆黒のオーラを放つ存在は『ウオオオオオオオオオオツツ!!』と雄叫びを轟かせる。

走る。

自分が■■■■■に食われないように、

速く。

自分が■■■■■に追いつかれないために、

強い一撃を。

自分が■■■■■をいつか殺すために、

もっと強く。

憧憬に近づくために、憧憬に追いつくために、

ならば、貴様は強くなりたいか？――

強くなりたい、もっと強くなって大切な人を守りたい。

――どんな風に強くなりたい？――

今の自分より速く、今の自分より一撃を強く。

――そうか、なら強くなるなくてな――

ああ、もっと強くなりたい。

――さあ、時間だ。目を覚ませ――

「おわっ、ぶっ!？」

オレが勢いよく起きると、オレの顔には柔らかい何かがあった。なんだこれ？と思いつながら手で触ってみる。柔らかい何かと言うしかないような……………

「たわけ！」

「ぶべっ!？」

そんな罵声と頭に感じた衝撃と共に目がさめる。オレの眼前にはエメラルドのとても綺麗な髪をして、とても整った王族ハイエルフがオレの瞳を見つめていた。その人は眉間にしわを寄せて、少し怒っているようだった。

オレはだんだん意識がはつきりしてきて、オレが今何をしたのかはつきり理解した、オレの顔が羞恥の顔に染まっっていくのがわかった。

「リリリリリリヴェリア・リヨス・アールヴさんつつつ!？」

「大声で叫ぶな、耳が痛くなる」

「す、すいません」

アールヴさんは顛顛こめかみを抑え、ふう、と息をついていた。多分この状況を整理するに、まずオレが今どんな状態であるのか、うん。アールヴさんに膝枕されてるね。

「うあああああああああ!!」

オレはすぐさま立ち上がり、頭を下げる。「すいませんでしたああああ!!」という言葉を添えて。

「もういい、私が好意的にやったことだしな」

アールヴさんは立ち上がり、疲れていたのか、首をぐるっと回す。オレは状況を把握しようと、周りを見渡す。場所はオラリオというところとは間違いない、オラリオのどこにいるかというところ、ダンジョンに最も近い噴水広場の奥にある、草むらにオレはいた。

オレもオラリオに住んでいるからここがどんな場所であるか知っていた。オレも父さんの修行をサボっていた時によく隠れていた場所、ほとんどの人がこの場所の存在を知らない。

「あの、アールヴさん。ここって」

「ああ、アイズがよく私の講習をサボろうとした時によく隠れていた場所だ、あの頃のアイズは言うことを聞かなかったからな」

ヴァレンさんもよくここに隠れていたのか、確かオレも小さい頃に「どこに行った!」という声に怯えていた子供がいた気がしなくもないが。

オレは「あははっ」、と苦笑いしながら辺りを見渡す。時間はもうすぐ日の出という時間だ。つてことはオレ3時間くらいアールヴさんの太ももにーそう考えるとオレは顔をまた真っ赤にしていた。

「あの、ところでなぜアールヴさんがオレなんかを看病してたんですか?」

「なに、私が招いたというのは違うが、私をかばって怪我をしたんだ。私が看病するのは当然だろう」

「そうだオレは怪我をしたんだ。オレは背中に大きくぶつかってできた大きな傷を手を後ろに回し、ペタペタと触りだす、痛みはない、傷も無くなっていた。それを見たアールヴさんはフツと笑っていた。」

「私が治したに決まってるだろ」

「あ、そうですね。アールヴさんですもんね」

「あとは、貴様のことが気になっていったというのも滞在理由になるな」「えっ!？」

オレはその言葉を聞いた途端、脳の機能が停止した。

「貴様のことはよく知っている。小さい頃から遠征の時私のことを見ていただろ?」

「えっ!?!なんで知ってるんですかっ!?!」

「当然だ。私はLv. 6だ。これくらい気づかずどうする」

「えっと、アールヴさんは元から気づいていたってことですか?」

「ああ」

オレはアールヴさんの真面目な顔を見て、嘘はついていない真顔でそう真実を告げた。オレは「うああああああ!!」と草むらでうずくまる。

「憧れってやつだろう、それくらい誰にでもある。あとアールヴじやなくてリヴェリアでいい」

「へ?」

「リヴェリアと呼んでいいと言ったんだ。一応助けてもらった側なんだこちらには、そんな謙虚にならなくてもいい」

「は、はい。アー……………リヴェリアさん」

「ああ、それでいい。まだ貴様と話したいことがあったが、今日は用事があるので失礼する。機会があるとしたら……………ふむ、
モンスターファイリア怪物祭は用事はあるか?」

「い、いえ!ないです!」

「なら怪物祭の時、少し時間をくれないか?」

「は、はい!ぜひ!おおおおお願いします!」

オレは一生懸命平静を装うとしたが、やっぱりダメで体が思うように動かなかった。

そんなことよりも、オレは先ほどいただいた、リヴェリアさんからのお誘いのことに想いを馳せていた。そんなことがあるだろうか、しかも別のファミリアでもある人に、憧れの人に誘われるなんて！

「ではな、当日に十時ごろでいいだろう。この噴水広場で会おう」

リヴェリアさんは後ろを振り向き、エメラルドグリーン^{エメラルドグリーン}の髪が揺れる、オレに背を向けながら帰っていく。

オレは今伝えないといけない。あなたを見ていたのは憧れよりも違う感情を抱いていたことに、こんなチャンスはないと思った。

「あ、あの!!リヴェリアさん!!」

「どうした?」

オレはリヴェリアの顔を見て、今から言おうとしたことを考えた。口が思うように動かない。顔が熱い、いや体全体が燃えてるように熱い。だからなのかオレは……………

「オレの名前は、ユウマ・アルセルドです!!」

「……………あ、ああ覚えておこう、ではな、ユウマ」

リヴェリアさんがオレの視界から消えていく。

「ああっ……………」という言葉を残しながらオレは吐血した。

オレがホームに帰ると、ベルがボロボロの服を着ていて寝ている、ベットの横のソファに立ち上がりヘステイア様は「むむむむむっ!」とほっぺたを膨らませ、とてもご立腹の様子だった。

そりや朝帰りだもん、ヘステイア様に怒られるだろう。と覚悟していたが、ベルがボロボロの状態で帰ってきたことが反動して、オレの^{ベクトル}方向に怒りが注がれている。

「ユウマ君、朝帰りだから、今まで何をしていたのかきつちり問い正そうとしていたけど、聞くまでもなかったね」

「へ?それはどういう……………」

オレの言葉が終わる前にヘステイア様は、飛びかかってきて、きてオレの背中に足を絡ませてくる。そうオレはもう逃げられない状況

オレが勢いよく立ち上がるとオレのお尻の上に乗っていた、ヘスティア様が転げ落ちる。オレは「スティタス」が更新された紙を受け取る。

ユウマ・アルセルド

L v. 1

力	:	G	201	↓	F	302	耐久:	H	145	↓	G	2
07	器用	:	F	300	↓	F	374	敏捷	:	G	229	
↓	F	348	魔力	:	I	0	↓	H	97			

《魔法》

【ブースト】

- ・ 五段階詠唱
- ・ 身体能力強化
- ・ 唱えるごとに魔力^{マインド}大量消費
- ・ 詠唱式【強化】^{ブースト}
- ・ 解呪式【弱体】^{ロスト}

《スキル》

【大切守護】^{ライカラムノーヴェ}

- ・ 守りたい思いが強ければ強いほど早熟する。
- ・ 守りたい思いが続く限り効果持続。
- ・ 絶望から立ち上がる時、超効果向上。

「ほああああああああっ?!?!?」

オレの声がベルを起こすほどの叫びを出したのはいうまでもない。

【魔法乱用】

魔法が発現して、ベルを起こすほどの音量を出した後、ベルが完全復活を遂げ、ヘステイア様に「ステイタス」更新を受けていた。

オレはわなわなと「ステイタス」の紙を握り、震えていた。震えていた理由としては驚きというのはあるが、それよりも嬉しさの方が勝っていた。

「うひゃ!?!」

「ど、どうかしたんですか? 神さま」

「い、いやなんでもないよ」

ヘステイア様はベルに「ステイタス」を口頭で伝えることにした。あまりにも成長が早すぎたんだろう、けれどヘステイア様はベルの「ステイタス」の成長速度を嘘つくのをためらった。

もし真実を告げれば、ベルが傲ってしまいかもしれないとヘステイア様は思ったからだ。傲りは一瞬の間になる、そのせいで何人もの冒険者が死んだ。傲れば傲るほど心に隙を生む。

「ベル君、ステイタスを口頭で伝えてもいいかな?」

だがヘステイア様は信じた、ベルを。ベルなら傲ることはない、ヘステイア様は朝ベルを更新してる間に作ったオレのコーヒーを一口飲み覚悟を決める。

ベル・クラネル

L v. 1

力	:	I	8	2	↓	G	2	2	1	耐久:	I	1	3	↓	H	1	0	1	
器用	:	I	9	6	↓	G	2	3	2	敏捷	:	H	1	7	2	↓	3	1	3
魔力	:	I	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:	:

《魔法》

二

《スキル》

リアリスフレゼ

【憧憬一途】

- ・ 早熟する。
- ・ 懸想おもいが続く限り効果持続。

・懸想おそいの丈により効果向上。

ありえないほど早い成長速度をヘステイア様はベルとオレに告げた。ついでにオレの魔法のことも。

「えええええッ!?ユウマ、魔法が発現したんですか!？」

「ああ、まあな、なんか起きたら魔法発現してたわ」

「いいなあ……………」

「あほおーツ!!君の成長速度も羨ましがれ!」

「ご、ごめんなさい!？」

ヘステイア様は声を荒げながらベルに説教していた。

「さて本題に入ろう。これを見る限り君はきつと強くなる。そして君自身も今より強くなりたいと願っている」

「……………はい」

ヘステイア様はベルに自分の思いをベルに伝える。ベッドに腰掛け、ベルはヘステイア様から目を離さず、じつと見つめている。

「約束して欲しい、無茶はしないって。この間のような真似はもうしないと、誓ってくれ」

「ぼ、僕は……………」

ベルの瞳が揺れる。きつとこれからも、無茶をするだろうと悟ったからである。オレはその光景を目を離さず見つめる。

潤みそうになった瞳を我慢して、ヘステイア様はベルに願った。

「お願いだからボクを一人にしないでくれ」

ベルとヘステイア様の間に長い沈黙が訪れる。ベルは瞳を閉じ、自己の内面と向き合う。

「はい、無茶はしません。頑張つて、必死に強くなりになりますけど……………絶対、神様を一人にしません。それは約束します」

「その答えが聞ければもう安心かな」

ヘステイア様はふうくと息を吐き体の向きをオレの方向に変えた。オレは内心ドキツとした。なぜなら、オレはベルみたいに無茶をしないとは言い切れない。

オレは強くなりたいと思っているが、誰かを守りたいという、気持ちに支配されている。誰かを見捨てたりすればオレは、自分の『スキ

ル』が消失する上に、もう冒険することはできないだろう。

「ユウマ君、君はきつと無茶をこれからもするだろ？」

「え？なんでそれを……………」

「ボクはこれでも神さまだぜ？そのくらいわかるさ、けれど一言だけ伝えるよ。強くなつてくれ」

ヘステイア様は自分の胸を押さえて、苦しそうに答える。ヘステイア様はオレに無茶をしてもいいということ伝えるのはとても心苦しかったのは気づいた。オレも逆の立場なら心苦しいというよりも、伝えることができなかつただろう。

「強くなつて、無茶をしてくれ、誰にも負けないくらい強くなつて、無茶をしてくれ、これがボクからのお願いだ」

そのかわり、ヘステイア様はたつた一つの条件をつけた、強くなつてくれと、誰にも負けないくらい強い力を、そして無茶をしてくれと。オレはそういうことなら胸を張って言える、大きく息を吸って吐く、そして瞳に力を込める。

「はい！オレ強くなります！誰にも負けないくらいに！」

「なら君も大丈夫だ」

ヘステイア様は何か決めたように「ヘファイストスもくるよね？」とか小声で呟いていたが何をするのかわからない。

ヘファイストスってあれだよな？神匠って言われてる鍛冶師だよな？確か『神の宴』がガネーシャ様が開くとかなんとか言ってるけど、それにヘファイストス様がくるかどうか、言ってるのかな？オレはめっちゃ気になったが、オレはそれよりもうずうずしていることがあった。

「ベル！ダンジョン行こうぜ！ダンジョン！」

「え、いいけど、やけに張り切ってるね」

「そりゃ、魔法発現したんだから張り切るに決まってるだろ！よし！15階層とか行っちゃおうかな!!」

「ぶっ!!あほおーっ!!そんなのボクは許さないからなあああ!!」

勢いで言つたつもりがヘステイア様が飛びかかってオレの頬を引っ張ってくる。オレは頬を引っ張られてるため、「へはいへえす、へ

ふていあしやま」と呟いた。

【強化】^{ブースト}

オレのステイタスが強化されたのがわかった。黄金色の光がオレを包む。敏捷も力も誰が見てもわかるくらい成長した。オレは強化された体を使い、怪物の群れに突っ込んでいく、コボルトの四肢をバラバラにしていく。

サイドステップでオレを切り裂こうとする一撃を軽々とかわし、そのまま強化された力で一撃で拳で粉碎。【強化】^{ブースト}されたことよって、剣を使わずに、拳で粉碎していた。

「げ、結構下まで来てたのか……………」

多分予測するに9階層。なぜわかったかと言うと、理由としては、コボルトの強化種がでた時だった。コボルトは黒い毛皮に覆われ、鋭い瞳と鋭い爪を持っているが、今回のコボルトは毛皮が赤い、まるで冒険者を食って、赤い血を浴びたように赤かった。

この魔法がどこまで、通用するか試したかったので、そのまま特攻。強化されたこの体で突っ込むが、強化種の大きな爪が、俺の進行を阻む。そのままかわすためにブレーキかけながら、バックステップ。そしてオレはそのまま詠唱する。

【強化】^{ブースト}

ギアが2段階目になる。ガチリツとオレの脳内で音を立てる。オレにまもっていた黄金色の光がより輝きが増す。魔力と引き換えに、体がより強くなったと実感できた。オレはその強化された身体を使い、突っ込む。

強化種のヘルハウンドの爪がオレを食い殺そうとするが、オレの魔法がその攻撃を躲す。右に大きく躲し、ダンジョンの壁を使いヘルハウンドの脇腹を粉碎する。そのまま黒い煙となって消える。

【弱体】^{ロスト}

オレはフツと息を吐き呪文を唱えると、黄金色の光が消え、オレに脱力感を与える。魔法を使って結構な時間がかかっている。それくらいデメリツトがあつたとしてもおかしくはない。

緒に食材を買いに行く。

「じゃあ今夜は豪華にステーキといきますか！」

「ユウマがお肉なんて珍しいね！お肉久しぶりだから楽しみだなあ」

ヘステイア様が待っているホームにちよつと高い、お肉を三枚買って、オレとベルは上機嫌で帰って行く。

【怪物祭（モンスター・ファイリア）】

「ボクこれから用事があるから、数日留守にするけどいいかい?」

「いいですけど、どこに行くんすか?」

「神の宴に行くのさ!」

ヘステイア様はオレたちにグツと親指を立てながらキメ顔で答えた。オレらはその姿に圧倒されて、「おおお……………」と声を出した。

「いつてらっしやいませ」

「うん!行ってくるよ!」

こうしてヘステイア様は数日間家を留守にすることになる。

ヘステイア様がいなくなつて数日、オレたちはいつも通りベルと一緒にダンジョン探索を終え帰ってきた。1階層の『始まりの道』とも呼ばれる横幅が限りなく広い大通路を進み終えると、地上へつながる大穴を見つけた。そして現在地は、白亜の巨塔『バベル』、その地下一階。

何人もの冒険者を目撃するが、一つ巨妙なことがあった。巨大なカーゴがあり、その箱がガタガタツ、と箱が揺れた。ベルは「いつ!?!」と声を出したが、オレはそれを見て理解できた。

ベルはオラリオに來たばかりの田舎者だ。この祭りを知らないのだろう。

「あーもうそんな時期か」

「え?時期って、なんかあのカーゴと関係あるの?」

「ああ、あれはな怪物祭モンスター・ファイリアに使う出しものなんだよ」

「……………怪物祭?」

オレはベルと帰る途中に怪物祭モンスター・ファイリアの説明をしながら、帰宅するでしょうと、心の中で呟いて、シャワー室に入った。

「いつまでそうやってるつもり?」

「……………」

紅眼紅髪の女神ヘファイストスが、呆れたような疲れたような声をこぼしていた。その彼女の視線の先には床に跪いてこれでもかど頭を下げている丸い物体、ヘスティアの姿があった。

「私これでも忙しいの」

「……………」

「ちよつとヘスティア？」

「……………」

「…………… はあ」

かれこれ丸一日ヘスティアはヘファイストスに頭を下げ続けている。『神の宴』があった日にヘスティアは武器を作って欲しいという依頼をヘファイストスは、ばつさり断った。

「ヘファイストス・ファミリア」の武器の作品は、最高品質であるため、一流冒険者などに使われている。そのためいうまでもないが値段が高すぎる。ヘスティアがバイトを何百年すれば稼げるのかわからないほど、高すぎる。

ヘスティアはベルとユウマのために武器を作って欲しいと極東の神タケミカヅチ直伝の土下座をヘファイストスに絶賛公開している。

「ヘスティア、あんたがなんでそこまでするかわからないのだけれど」

「あの子達の力になりたいんだ！」

ヘスティアは土下座をしながら強い声音で吐き捨てた。

「いまあの子たちは変わろうとしている！ベル君は、高く険しい道のりを走り出そうとしている！危険な道だ、だから欲しい！ユウマ君は誰かを守ろうと無茶ばかりしている！だから欲しい！あの子たちの手助けになる武器が！」

ヘスティアは叫ぶ。自分の惨めな格好を崩さず、自分の秘めてる想いをヘファイストスに叫ぶ。

「…………… 何もできないのは嫌なんだよ」

しばらくして、ヘファイストスはヘスティアの想いを、彼女は認めた。

「…………… わかったわ。作ってあげる、あんたの子にね」

ぱつと瞠目した顔を振り上げたヘスティアは、ヘファイストスに擦

り寄る。

「うんっ！ありがとうへファイストス！」

満面の笑みで、ヘスティアはへファイストスに抱きつく、へファイストスは少し顔を赤らめ、「鬱陶しいから離れなさいっ！」と告げ、突っぱねる。

「で、言っとくけどらちゃんど代価は払うのよ。何十年何百年かかっても、絶対にこのツケは返済しなさい」

「わ、わかってるさ！ボクだつてやるときはやるんだ！ベル君とユウマ君への愛が本物だつて、身をもつて証明してあげるよ！」

「はいはい、楽しみしてるわ。で、あんたの子達えものが使う得物は？」

「えっと、ベル君はナイフで、ユウマ君は拳と剣かな」

「ちよつと待つて、ユウマつて子。拳で戦つてるの？」

へファイストスは驚いた顔をしながら、ヘスティアに尋ねる。ヘスティアは困ったように顎に手を当て、ユウマの武器を考える。彼は剣よりも拳の方が得意と知っているから作るものは、拳で戦う時手助けできる武器がいい。

へファイストスがヘスティアの真面目な顔を見て、ユウマの武器を考える。

「……………拳で戦うつてことは、ガントレットつてところかしら」

「そう、だね。ナイフとガントレットを頼むよ！」

「簡単に言ってくれるわね、これからやる作業あんたも手伝いなさい。今からしつかり働いてもらおうから」

(駆け出し冒険者に持たせる、一級品装備)

武器の威力が高過ぎれば、成長を妨げ、かといって、適当に作ればへファイストスの名折れ。

へファイストスは首をぐるつと回しながら、自分の工房へ向かう。隣で嬉しそうに付いてくるヘスティアをちらりと見やりながら、心の中で呟く。

(さて、どうするか……………)

ヘステイア様がいなくなつてから3日目の朝。オレは10時から特別な用事がある。そのためにはベルに断りを入れないといけないが、ベルの決心した顔を見ると、言いづらい、オレだけデートなのか？デートほいことをするなんて。

オレは少しため息をつきながら、西のメインストリートをベルと一緒に歩いて行く。豊穡の女主人を通つた時、アホっぽい声がオレの耳に響いてくる。

「おーいつ、待つニヤ！ユウマ、白髪頭ー！」

呼ばれた声の方向に振り向く、そこにはネコ耳と細い尻尾を生やしたキャットピールの少女が大きく手を振っていた。そうアーニヤさんがこちらを呼んでいた。

「これをシルに届けて欲しいのニヤ！」
「ええつと」

アーニヤさんの手にはお金を持ち運ぶための財布を持っていた。うーんシルつて結構おちよこちよいだからなあ。モンスター・ファイア怪物 祭に行く時に忘れたみたいなきな感じかな

「アーニヤ。それでは説明不足です。ユウマもクラネルさんも困っているでしょう」

リユーさんがひよっこり店の中から現れ、オレたちに近寄ってくる。ナイスタイミングつていうぐらい、オレは歓喜していた。

「リユーはアホニヤー。店番サボつて祭見にいったシルに、忘れたいった財布を届けて欲しいなんて言わずともわかるはずニヤ」

「いや、わからないですよ」

「ということですが、言葉足らずで申し訳ありません」

「あ、いえ、じゃあユウマ、一緒に行こうか」

「あーすまんベル。今日10時から予定があるんだ」

ここでオレは切り出すことに決めた。シルを探しに行くのは実質ベル一人ということになる。すまんベルと付け加え、オレは噴水広場まで走り抜ける。ベルの叫び声が大きく聞こえるが、オレは無視を突き通し、走り出した。

「す、すみません、遅れちゃいました」

「ちようど5分前といったところだな。女性を待たせるのは感心しないぞ」

「す、すみません」

噴水広場まで駆け出し、ちようど5分前といったところで、オレは息を整えながらリヴェエリアさんに返答した。

リヴェエリアさんはいつもの冒険者の服を着ていた。

ちなみにオレの格好はというとオレも冒険者の服を着ている。

「さてこれからどうするかだが、どこか行きたい場所とかあるか？」

オレはことに質問は来ると思っていた。リヴェエリアさんという憧れの女性がいるのに、どこ行くのかも決めてないのは男として、ダメだと思ったので、事前に決めておいた。

「あ、あの！服屋とかに行きませんか？」

「服屋？別に私は困ってないが、ユウマは見たいものでもあるのか？」
「い、いえ。それもあるんですけど、いつもその服でしか見かけないので、なので自分も買える機会が欲しいなと思ったので」

「別に私はいつもこれだけを着ているわけではない。外に行くときは大抵この服というだけだ。……… まあお前も見たいものがあるというのなら、そこに行こう」

「あ、ありがとうございます!!」

オレはリヴェエリアさんをエスコートすべく、少しだけ前に立って歩き、オレらは歩幅を進める。

「ふむ、次はこれを着てみる」

「は、はい」

オレは完璧に疲れ切った声で、リヴェエリアさんから服を受け取る。そしてまた試着室に戻って行く。なぜ今リヴェエリアさんの玩具になっっているかという時は数分前に戻る

まず、オレは目をつけていた商品を探すことにしたが、見つかることはなく、多分売れたんだろうと理解した。まあ、リヴェエリアさんが喜んでくれるならとリヴェエリアさんに視線を向けると、男用の服を持

ち出し、オレに着てみると告げた。

オレの試着を見てから、リヴェリアさんは歯止めが効かなくなり、オレを着せ替え人形のようにどンドン着替えさせ始めた。これでオレが着るのも17着目だ。

17着目の服を着終わると、リヴェリアさんは少し考え始めた。

「ふむ。見た感じこれが一番似合うだろう、ユウマはそれがお似合いだ」

「あ、ありがとうございます……………」

心底疲れていたが、リヴェリアさんに似合っていると言われるだけで解消された気がした。なんて単純な男なんだと落胆するとともに、とても嬉しかった。

「り、リヴェリアさんもこんな服どうですか!!」

「これか？」

オレは着せ替え人形にされるうちに着たら似合うだろうなと思っただ服をリヴェリアさんに提示する。オレが提示した服は、真っ赤なフリル付きのドレスを渡した。

「私も調子に乗ってユウマを着せ替え人形にしたんだ。わたしもこれくらいなら着てみよう」

そう言っただ服を持ち、試着室に入る。ガサゴソと音を立てていて、リヴェリアさんがあそこで着替えてると思うと少し興奮したが、すぐにそんな思考は振り落とす。

しばらくするとリヴェリアさんは更衣室のカーテンを開けオレにお披露目してくれる。

「どうだ？少し家のことを思い出してしまっただが、悪くない」

「……………」

「ユウマ？聞いているのか？」

「……………は、はい!!とつても綺麗でございます!!」

リヴェリアさんの整った容姿に、スレンダーな体が合わさりそのドレスが、驚異的に見えて、脳の処理が追いつかなかった。

オレは訳のわからない敬語を使い、それぞれ会計を済ませ店を出るのであった。

「あの、それ買ってよかったですか？」

オレたちは、オレは服を奢ることができなかつたので、今回はお金を無理やり出し、ジャガ丸くんの小豆クリーム味を買って食べ歩きしているところだった。

ストリートは賑わっていて、人混みがたくさんいたが、リヴェリアさんの貫禄なのかオレたちに人がぶつかることなく、スイスイストリートの中を進めた。

「なんだ？ 似合ってたなかったのか？」

「い、いえ！ 似合っていたんですけど、オレなんかの言葉を受けて買ってしまっなんて」

「ユウマ、自分をそこまで卑下するな、謙虚になることは悪いことではないが、ある程度自信を持った方がいい。人としてもそうだが、冒険者としても大切だ」

「冒険者としてもですか？」

「そうだ、いつか冒険者と呼ばれるためには冒険をしないといけない。ランクアップもそうだ。自分を卑下していけば、人としても、冒険者としてもダメになる。私はそうやって朽ちていく人間を見てきた」

リヴェリアさんはジャガ丸くんを一口食べながらそう答えた。冒険者として何十年もやってきた、彼女がそう言ったんだ。何十年もかけて第一級冒険者と呼ばれるほどに成長した彼女が言ったのだ。

ならばオレが信じないわけがないだろう。ましてや憧憬である彼女の言葉を鵜呑みにしないのは、ダメだと思ったからだ。

オレはこのムズムズした気持ちをリヴェリアさんに伝えようとして、ちまちま食べていた、ジャガ丸くんを一気にガツガツ食べ、胃の中へ放り込んだ。

「リヴェリアさん！ ダンジョンに付き合ってくださいませんか！」

「ダンジョンに？」

リヴェリアさんはこちらを少しこちらの顔を見て不思議そうな顔をしていた。それもそうだ、怪物祭^{モンスター・フェア}当日にダンジョンに行く人物は少ない。けれどこの気持ちを解消するにはダンジョンに行くしかないと思ったからだ。

「あれ？ユウマ？」

そんな声が聞こえると、オレは少し嫌な予感がした、何かあるたびにオレに怒りを向けてくる、ロリ巨乳がある気がしたからだ。

そうそこには、際ほど逃げて、面倒ごとを押し付けた。ベルと女の子と一緒にいるといつも怒るヘステイア様がいたからだ。

「な・ぜ・君・は！いつもいつもおんなのこといつしよにいるんだあああああああつっ!!」

ヘステイア様はオレの首に足を絡めて、飛びついてきた。

オレはこの瞬間ほどオレの顔に巨乳が当たって、嬉しくない日が来ようとは思ってもいなかった。

【ダンジョン探索】

「で、ハイエルフ君と待ち合わせして、今に至るのか」

「は、はい。ヘステイア様納得しましたか？」

「まあ、そのハイエルフ君は君のことを対象として見てないようだし、なら許すか」

ヘステイア様はボソボソつと最後に何か呟いたがオレの耳に届くことはなかった。芝生でヘステイア様と出会って数分。ヘステイア様にこつぴどく叱られることはなかった。

オレはヘステイア様の背中に背負っている2つの袋が気になった。1つは小さく、もう一つは少し大きめだった。

「で、これからリヴェリアさんと一緒にダンジョンに行こうと思うんですが、ダメですか？」

「……………ハイエルフ君、君は許可したのかい？」

「今日はユウマと怪物モンスター・ファイア祭を過ごす予定だ。ユウマがダンジョンとこのならば、私も期待に答えるつもりだ」

ヘステイア様はムツつて顔をしていたが、すぐにため息をつき、こちらにちよいちよいと手招きして来た。

「ユウマ君、ちよつとこつちにくるんだ」

「は、はい」

オレはヘステイア様に呼ばれたので、ヘステイア様の近くまで寄っていく。ちよいちよいと身の丈を合わせると手を招かれたので少しやがんでヘステイア様の身長に合わせる。

ヘステイア様はオレの耳に口を近づけて、オレとヘステイア様しか聞こえない音量で喋り出す。

「いいかい、第一級冒険者がいるなら安心だけど、油断はしちやダメだ。特にハイエルフ君なんかには手を出したら、他のエルフたちが黙ってないぞ!!」

「途中から話し変わってませんか？ヘステイア様？」

「あと、魔法はしようがないとして、スキルのことと言つちやダメだぜ？そのスキルはレアスキルなんだから、噂に上がったら大変だ」

「は、はい」

「あとこれを君に」

「これは？」

一つの大きめの紫の袋に包まれた物体を貰った。見た目よりも重量があり、「うっ！」と情けない声を出してしまった。けど意識して持てば、重さなど感じられない。

「君が今日大変なことが起きた時、この袋をあけてくれ、きつと君の助けになるものが入ってる」

オレはヘステイア様が数日留守にしていた理由がわかった気がした。きつとヘステイア様はオレたちのために『何か』してくれていたのだろう。

ベルは素っ頓狂な顔をしているがベルにも贈り物があることなんだろう。ベルがヘステイア様からもらった時からがどんな顔をするのか少し楽しみになった。

「行って来ます！ヘステイア様！」

「ああ、いつてらつしやい、けど!!変な気を起こしたら許さないからなああああつっ!!」

最後のなければいい話なんだけどなあ。

ダンジョン10階層。

「はあああああアツツ!!」

襲いかかってくるインプを両断し、豚頭人身のオークの大ぶりの一撃を右に躲し、躲した先にいた、オークの頭を抜刀した剣で3体同時に切り抜く。合計で34匹の怪物を倒していた。そして今の攻撃のおかげか、怪物の宴で出現した怪物たちが霧の中へ消えていく。

【弱体】

ふううと一つため息をつき、【強化】を二段階目にしていたのを解く。オレに脱力感が襲いかかって来て、体を重く感じた。少し休憩するためペたりとその場に座り込む。

「お疲れ様というべきか、怪物の宴を一人で切り抜けるとは、私も少し手伝おうと思ったんだがな」

リヴェリアさんが近寄って来て、杖を先をオレの頭に当て、コンツと音がした。痛みはなかったが、頭をさする。

ちなみにリヴェリアさんの格好は今日の朝買った、服のまま入ってきている。ダンジョンでほかの男冒険者が見たら目を引かれることだろう。オレが守らないと！

「無茶をしすぎだ。少しは私を頼れ、まあ同じファミリアではないからその気持ちもわかるのだけだな」

「いやそんな気持ちじゃないんです」

「なに？」

「いや、そのオレって、いつか冒険をまたしなさいといけないと思ってるんです。頼る癖がついていると、自分がダメになつてしまうというか」

たしかにオレの気持ちはすごくいけないことなのかもしれない。仲間を頼る。それはたしかに必要なだろう。

けれど、今起こるかもしれないし、明日起こるかもしれない、そんな冒険が来た時に、仲間がいなければ一人で対処しなければならぬ。リヴェリアさんに頼むのはダメなことだと、自分の心のどこかで否定してしまっているのかもしれない。

「私もそう思うことが今でも時々ある」

リヴェリアさんがオレの目をしっかりと見て、ゆっくり喋り出す。オレの目を見た後、ゆっくり景色を見渡す。先には仲間と共に戦う四人の冒険者が協力して怪物モンスターと戦っていた。オレもつられるようにその景色を見る。

「私が冒険者というのは、困難を経験し、それを乗り越え、冒険をしたものだけが送られる称号だと私は思う」

仲間と一緒に戦ってる冒険者は倒した怪物モンスターのドロップアイテムを入手し、喜び、先に進んで行く。

「冒険というのは曖昧だが、自分一人で乗り越えるものだけではない。仲間と乗り越える冒険もある。だが仲間を信じすぎるとたしかに悪いこともある」

冒険者たちは、10階層に現れた怪物モンスターパーティーの宴に被害に遭っていた。

オレはそれを見て助けに行こうと腰をあげる。だがリヴェリアさんが杖でオレの行く先を遮る。

「見ている、あれは上辺だけで作られたパーティだ。仲間のこともよく知らない。理解しようとしな。だが先ほどの戦いで仲間を信用した結果だ」

四人の冒険者は、背中合わせに戦い、目の前の敵だけを打ち取り、自分の後ろにいる敵を仲間任せに任せている。しかし大きな盾を持つ、防御役がだんだん押されていき、冒険者たちの体制が崩れて行く。

「あれが仲間を信じすぎた結果だ。だがお前がいれば結果は変わるだろう？」

「え？」

「行ってこい。己の力を信じて戦ってこい。見たところ魔法も使えるようだしな」

リヴェリアさんは杖を引つ込め、オレの遮るものがなくなった。リヴェリアさんの言葉を胸に刻み、足の指に力を入れる。

【強化】

オレの踏んでいた地面が半壊し、地面の一部に亀裂ができたのがわかった。一歩一歩に力を込め、踏み出して行く。景色である霧の粒子がどんどん流れて行く。

「うああああああああっ!?だ、だれか助けてくれえええええええっ!?」

「はああああああああっ!!」

怪物を一体一体しっかりと狩っていく、素手でインプの腹部を破り、回し蹴りで、オークの頭を吹き飛ばす。

「防御役!!まだお前は動けるだろ!仲間たちを守れ!」

「は、はひひひひひっ!?」

リヴェリアさんの罵声がオレや冒険者の耳に響き渡る。防御役は駆け足で動き出し、冒険者を守りだす。オレはそれを見て眼前の怪物だけに集中する。オレは抜刀し、殺意を込める。

【強化】よし、覚悟はいいか化け物ども!」

「貴様ら仲間を過信することは良いことだが、仲間をあまり知っていないのに、過信するとは何事だ！」

「二す、すみませんでしたあああああっ!!!」

「今この場に、私たちがいなくなったら貴様ら死んでいたぞ。それを肝に銘じて、この場をされ」

冒険者四人は化け物でも見たように、怖がりながら駆け出して行った。リヴェリアさんって見た目通り近寄りがたい人なんだけど、根は優しいんだよなあ。

「わかったか？けど信頼できる仲間がいれば違う。仲間の力量を把握し、時には仲間の援護し、時には仲間から救援を受ける。それが『仲間』というやつだ」

「……………なんとなくわかった気がします」

仲間ってオレが一番に思い浮かぶのはベル。ベルを信頼するに値するか、『値する』と即答することができる。ベルは今頼りなくて、すぐ泣いて、オレに助けを求めようとする、そんな弱い子だけだ。

けど弱くあろうとしてない。いつでも上を目指し、弱い自分から逃げ出そうとしている。そんな彼を助けたいとオレは思うし、そんな彼とまだ弱いオレと一緒に成長したいとそう思えた。

「ほう、ならそれでいい。その関係を大切にな」

「はいー」

オレは大きな声で返事することができた。もっと強くなろうとそう思えた。

だからなのかオレは。

「あ、あのリヴェリアさん、お願いがあるんですけど」

「おい、あまり無理をするな」

「だ、大丈夫です、まだいけますー！」

オレとリヴェリアさんは現在12階層に進んでいた。

時は戻って数分前リヴェリアさんに無理を言っつて、12階層まで進んでいた。さっきは仲間頼るのは甘えだとか言っつきながらリヴェリアさんに甘えてるオレがいる。なんかすげー嫌だわ。

怪物を何匹か倒した後、霧が濃くなってきた。こんなに霧が濃い階層だったか？と不思議に思うのも仕方がない気がした。後ろを見てリヴェリアさんの姿を確認しようとするが、いない。

あれ？これって結構まずい状況？

オレがリヴェリアさんの名前を叫ぼうとした時。

「やめておいたほうがいいよ」

「ッ!」

黒衣を被った人物がそこにいた。目深に被ったフードからこぼれ落ちていた濃紫色の髪は女性ののように長い。

リヴェリアさんじゃない、ましてや冒険者でもない。多分あれは『神』。オラリオにずっといたからわかる。あれは神の風格というか、オーラを感じる。

「自己紹介するのは、止められてるんだけど、まあいいか僕は神タナトスと言うんだ」

「…………… タナトス、様？」

「死を司る神なのさ僕は」

「で、神様がオレに何の用ですか？」

「おや？警戒してるのかい？」

警戒をしないほうがいいがおかしい。神がダンジョンにいる。それ自体で不審になる。神はダンジョンに入っただけとはいけない。これはオラリオに住む者なら誰でも知っているルール。それが今破られ、神がダンジョンにいる。

「警戒しなくてもいい、君にいい話をしにきたんだからね」

「いい話、ですか」

「そう、君は力が欲しいかい？」

「そりゃ、もらえるものならもらいますけど」

「うん、いい回答だ。なら僕のもとにこないかい？」

タナトス様は黒衣を被りながらも口元を緩ませ、オレに問いかける。オレに何を惹かれて、何をオレに求めているのかは知らんがそんなもん答えは。

「ごめ……………」

「回答を出す前に僕の話をしし聞いてくれるかい？」

「どうせ聞くまで、答えは出せないんですよね。なら聞きますよ」

「君と直接あったのは今日が初めてさ、けれど僕は君のことを出会う前に知っていた」

タナトス様はクルツと半回転してオレに背中を見せる、両手を広げて、まるで喜びを表してるような姿勢をとった。

「君が初めてダンジョンに潜った時の姿を僕は見たのさ」

オレが初めてダンジョンに潜った日。それはオレが死にかけになった日でもある。その姿を見ていた？ いや、視線は感じなかった。

オレの思考はいろいろまとめようとしているが、タナトス様はそのまま話を続ける。

「僕は死を司る神だからね。君は恩恵も持たずにダンジョンに潜るなんて、死んだとそう思えたよ。けれど君は違った。泥臭さを感じさせながらも戦った。生きるために！その生への執着！僕はとてつもなく興奮したよ」

だからと付け加え、また半回転して、こちらに視線を向ける。先ほどとった姿勢を変えて、まるでオレに握手するように手を差し出して。

「僕は君に見惚れたのさ、だから君は僕の近くに来て欲しい、そして僕の近くにいる代わりと言ってはなんだけど、力を君にあげるよ。今よりも、もっと強い力を君にあげることを約束しよう」

力、オレがいま一番と言ってもいいくらい欲しいもの。きっと彼についていけば、その力はどんなものであれ、もらえるのだろう。たとえ今の自分が壊れたとしても。

けど。

「答えは変わりませんよ。オレはヘステイアファミリアの一員なので、答えはごめんなさいです」

オレは今の自分として成長したい。ベルとヘステイア様と。そんな今が気に入っているから、守りたいから強くなりたいとオレは願っている。今の自分が壊れれば、その気持ちはきつとなくなってしまうのだろう。

「……………そうか君も断るのか。八年前と同じだな」

「……………八年前？」

「まあ、いいか。君の抗う姿もまた見て見たいしね」

「えっと、なんのことでしょうか？」

タナトス様は先ほどと全く違う。両手を広げているが、先ほど感じる微かなオーラが、もう認知できるようになる。その瞬間地面が揺れる。まるでダンジョンが雄叫びをあげているような。

「ユウマー！そいつからはやく離れろ!!」

リヴェリアさんが走ってこちらに近づいてくる。リヴェリアさんはその存在を知っているかのようにオレに危険を知らせてくる。距離は遠い。リヴェリアさんの足を持って、15秒ほどかかる距離。

「リ、リヴェリアさん!?!これは一体!?!」

「説明は後だはやく……………」

オレとリヴェリアさんがもう少しで近づける時に、オレとリヴェリアさんの間には壁ができオレは完全に閉じ込められた状況になった。

オレはこの状況に振り回されていたが、元凶であるタナトス様に視線を向ける。

「では、またいつか会える日を楽しみにしているよ、まあ、君が生きていたらだけど、ね」

タナトス様を捕まえようとすると、手が届く前に、霧の奥へ消えて言った。追いかけてようと、魔法を使用しようとすると、その前にもつとヤバい何かを感じ取った。その感じ取ったその脅威を目にするのは、すぐだった。

「なんだよこれ」

エイナさんに知識を叩き込まれなければわからなかっただろう。決して上層には現れることではない怪物モンスターその怪物の名は、『ワイヴァーン』

【生き抜くために】

ワイヴァーンの本来の色なら退紅色あざぞめの体軀は、漆黒かつ強靱な鱗に覆われている。ユウマはすぐに理解することができた。あれは、ワイヴァーンの『亜種』だ。

ワイヴァーンは無数の牙を上下に開き、開口する。口腔の奥で燃え盛る炎。ユウマはその脅威に気づきすぐさま、抵抗を開始する。

「強化、強化」!!」

『ツツツ!!』

瞬時に魔法を唱え、身体を右の方向へ飛ばした。そのままゴロンと転がり、瞬時に立つ。本来あるはずの広間ルームの霧は吹き飛ばされていた。いや、焼き滅ぼされていたという方が正しいか。

ユウマは瞬時に判断していなかったら自分も霧のように、焼き滅ぼされていただろう。その想像をすると冷や汗をかいてしまっていた。そんなことを考えてる間でもワイヴァーンは目の前の敵を抹消しようとする。

飛躍し、宙空より急降下で襲いかかる。まだ今ならユウマは回避できる。だが回避したところで、この状況は変わらない。かえって悪くなってしまう。ユウマは覚悟を決め、この怪物モンスターと対峙することに決めた。

『オオオオオオオオツッ!』

「クツッ!」

抜刀し、狙いを定める。今ユウマが狙っているのは相手の目。視界を奪えれば、こちらが有利に運べるからだ。だが失敗すればただでは済まない。最悪、即死じゃなかったとしても、重症を負うことになるだろう。

なのでユウマは、回避と攻撃を同時にしようとしてユウマは考えた。竜はどんどん近づいてくる。30メートル、20メートルと近づく。

そして時はきた。5メートルになる瞬間、抜刀した剣の柄を地面に突き刺し、右へ回避。ここまで引きつけたのは、敵が転回しないためと、位置を見定めるため。

そして急に移動した敵を捕らえられる当然出来ず、そのまま地面へ突っ込む。

『ギャオオオオオオオオオオ!?!』

竜の左目が潰れた。赤い血潮を流し、もつとも柔らかいであろう、目の部分はすんなりと貫通した。目に剣を突き刺したまま、痛みに悶える。その瞬間をユウマは見過ぎさなかつた。回避した直後、砂煙が大きく舞っている、空間に飛び込む。

【強化】

脳内でカチリと音がして、ギアが一段階上がる。今のユウマの状態は三段階移行している。ここまで出したのは今回が初めてだった。だが今戦っている敵は自分より格上。出し惜しみなんてしてはならない。

だがいきなり、強化をいきなり最終段階にしてしまえば、後半戦は精神疲弊してしまう。重要な場面の時にギアを上げようと、ユウマは考えていた。

「ユウマ！私も詠唱に入る。私が詠唱を終えるまでは耐えてくれ！」

『ヴオオオオオオオオオ!!』

「ツツ!!」

今聞こえた声はリヴェリアの声だった。ユウマはリヴェリアに返事を返すほどの余裕は残されていなかった。リヴェリアの詠唱がかすかに聞こえる。ユウマは竜に致命傷を与えるほどはできないと理解していたが、一泡吹かせてやろうという気力が出てくる。

ユウマはまず最初に狙ったのは、左目に刺さっている、剣を狙った。強化された速さで、右手で掴む。そのまま引き抜き、その勢いのまま、回転斬りを繰り出し、竜の硬い背中の鱗を削っていく。

『ふツツツツツツ!!!!』

『グオオオオオオオ!?!』

綺麗に着地し、痛みに悶え苦しむワイヴァーンを見る。ユウマはこの瞬間、ワイヴァーンを舐めてしまっていた。今のオレなら勝てる我慢心してしまっている。ここが冒険をあまり経験していない、初心者が命を落とす原因。

実際、ユウマは危機的状况には気づいていなかった。人間には持つていない、第三の攻撃、尾の攻撃をユウマの死角からワイヴァーンは繰り出す。

繰り出される、尾の攻撃、それは相手の心臓を狙ったのか、心臓を貫こうと伸びていく、防御か回避ガードをしなければ即死する攻撃。その攻撃をユウマは反応するのが一瞬遅く、回避することは不可能だった。「グッツ!!」

なんとか剣で防御ガードできたものの、吹き飛ばされたため、竜と距離を離される。壁にぶつかり、吐血する。ユウマは、痛みを顔に表しながらも、立つ。骨が軋んでいるのがわかった。

顔を上げれば、竜は開口し、口腔の奥で炎の塊が燃えていた。

リヴェリアは詠唱は終えていた。しかし、魔法を唱えることができなかった。理由は簡単。ユウマに被害が及ぶからだ。壁の向こうでは、怪物モンスターとユウマがいることだろう。

リヴェリアはこれまでの経験則で、音で大体の位置を把握できていた。ユウマは今私の近くにいと、リヴェリアは感じ取っていた。このまま放てば、怪物モンスターもろとも、ユウマは焼け落ちるだろう。

今ユウマにそこから離れろと言っても、怪物モンスターが先にいる。まさに八方塞がり、リヴェリアはユウマの位置が変わることを祈り、魔法待機状態に移行した。

相手の炎の攻撃をかわして三度、彼は疲弊していた。リヴェリアからの援護は来ない。リヴェリアの魔法を、ユウマは見たことはないが、きつと強大なものなんだろうと理解はできていた。だが強大すぎるゆえに、きつと自身も食らってしまうのだろうと思っていた。

実際、竜との距離はだいぶある。その位置を変えることができれば、リヴェリアからの魔法の支援を受けることができるだろう。彼はこれ以上戦いが長引けば、自分の命が尽きるこがわかってる。

ユウマは今いる場所から離れようと、駆け出す。ワイヴァーンはそれを許さないとばかりに、灼熱の炎を吐き出す。それを完全に回避し

これこそが、神タナトスが望む、死というものが近づいてくる。ユウマを包む。黄金色に輝く光も徐々に薄れていく。すると、足音とは違う音が響いた。カランツ、という音に気づき、音がした下を見る。

「これは……………！」

神へステイアからくれた、贈り物が入った紫の包みが肩からずり落ちた。今まで落ちていなかったのが不思議だが、へステイアからのご加護だと、勝手に結論づけたユウマは少し笑ってしまった。

危機的状況になった今、ユウマは包みを開けることを決めた。その中には、猛々しい、灼熱の色をした、ガントレットと呼ばれるものが存在した。

それをすぐさまユウマは装備する。へステイアがユウマの手のひらのサイズを知っているのかと思うくらい、ちょうどよかった。そして、不思議と力が湧いてくるような気がした。

ユウマの消えかかっていた闘志に火がつく、黄金色の輝きも強くなる。

「へステイア様、ありがとうございます。このお礼はちゃんと面と向かって挨拶します。それまで待っていてください」

彼は駆け出す

「一体どうなっているー！」

リヴェリアが驚愕したのも無理はない。

魔法待機状態をずっと続けていると、この数分の間で、ユウマが何か変わった。音だけでしか聞こえないが、わかる。

ワイヴァーンとの好戦がまた始まった、ユウマとワイヴァーンがほぼ互角、いや気迫だけなら彼の方が優っている。ユウマはワイヴァーンを仕留めようと、確実に接近し戦っているのを理解できた。

リヴェリアは魔法待機状態をやめ、違う詠唱を始めた。彼の勝利を願って、彼の生命を助けるためのすべになることを祈って魔法を唱える。

「【集え、大地の息吹——我が名はアールヴ】」

「【ヴェール・ブレス】」

自分の身体に何かまとわりついたのが感じた。考えるまでもなかった。リヴェリアの魔法だとユウマは理解できた。心の中でありがとうと、眩きながら眼前の敵を見据える。

生きて帰る、ベルにまだ教えたいこともある、ベルとまだ夢を果たしていないではないか。また、この武器をくれたヘステイア様に感謝もしていない。オレが死んだらヘステイア様にまだ恩返しもできていない、まだ死ねない。

そして、リヴェリア様に本当の冒険者と認めてもらってないんだ。認めてもらいたい。何度も、修羅場をくぐり抜けている、リヴェリア様に認めてもらいたくて、そして何より、リヴェリア様に追いつきたくて、まだスタート地点にも立っていないんだ。

今この冒険を終えて、冒険者になろう。

そうだ、冒険者は冒険をしないとイケない。

今この時だ、オレが、オレが冒険するときはこのときだ。

オレは、オレを越えよう。

「うおおおおおおおおおおおおお!!!」

「ツツ!!」

気迫に押されわずかに後ずさる。ユウマはその瞬間を見過ぎさなかつた。一步踏み出し、跳躍する。相手の頭上まで飛んだとき、そのまま拳を振り下ろす。

「フツツ!!」

『グオオオ.....』

鱗が砕ける音がした、その一撃に耐えきれず、頭を地面に叩き落される。土煙が舞い、この一撃がとてつもない衝撃だと思わせる。

まだだ、まだ仕留めきれない!

ユウマはすぐさま落下し、ワイヴァーンの腹部の下に潜り込む。そのまま、^{フラッシュ}連撃を叩き込む。

「うおおおおおおおおおおおお!!!」

『グオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

辛い、痛い、苦しい、そんな感情が沸き起こる中、一撃、一撃を稲

妻のように叩き込みながら、吹っ飛ばしていく。負けたくない、勝ちたい、そんな気持ちが湧き出てくる。

「強化!!」
ブースト

最終段階、彼の最後の力を振り絞り、ワイヴァーンを仕留めようとする。最終段階になった途端、魔力の消費量がこれまでとないくらい減っていく、あと2分この戦いが続けば、彼は精神疲弊マインドダウンが起こり、殺されるだろう。

『グオオ、オオオオオオオオ!!』

「なッ!？」

またしても、不注意、人間には真似できない、尾の攻撃。不注意だった故、回避も防御ガードもできない。心臓を穿つ一撃、それをもろに、食らってしまう。

ラッシュしていた手もワイヴァーンから離れ、そして転がっている。何回転も何回転もしながら、ワイヴァーンは勝利を確信した。雄叫びをあげようとした瞬間、やつはきた。

「まだだああああああああ!!」

ユウマは雄叫びをあげながら、突っ込む。回避も防御も許さない一撃、彼は防ぐことができなかった。だが、リヴェリアの魔法が救っていたのだ。もし助けがなければそのまま死んでいただろう。

爪の攻撃をガリガリツと音をさせながらも、左手のガントレットで擦りながら防いでいく、本当にこのガントレットはよくできている。ユウマの身体の一部のように、存在してくれる。一撃も重い、ユウマの力を最大限引き出してくれる武器だと感じた。

攻撃を一撃、一撃決め、爪の攻撃も防ぎ、尾の攻撃も回避する。ユウマが一方的に試合を進めていく。だが、あと1分もすれば、力つきるだろう。この攻防戦は、「必殺の一撃」を叩き込むためにユウマは準備しているものでもあった。

父親が教えてくれた、「必殺の一撃」相手の芯を貫く、そんな一撃。「捉えた」

攻撃を避け、敵とゼロ距離になる。芯は敵の心臓。敵の心臓に右手の握り拳を当てる。自分の身体と握り拳もゼロ距離、これで準備が整

う。必殺といえど、この姿勢を取らなければ、その一撃を放つことはできない。なのでユウマは敵の体力を削る必要があった。

「貫く」

自分にまよっている黄金色の光が強く輝く。

大きく力強い一步を踏み出す。それと同時に、拳もひねりながら前へ、貫く。

「いっけええええええええええ!!」

『グオオオオオオオオオオオオ!!』

貫いた、自分にまよっていた、黄金色の光が衝撃波を出すかのように、まっすぐ一直線に、ワイヴァーンを貫いていた。

閃光と衝撃。

それが放たれた一撃の全てだった。

弾け飛ぶ怪物の体。灰となり消し飛んだ。そこにただ一人立っているのは勝者だけだった。

勝者は一人。ユウマ・アルセルド。

ユウマは拳を掲げて、意識を落としていた。

【サポーター】

一人の勝者として成り上がったユウマは、拳を突き上げた後、そのまま後ろに倒れ、気絶していた。

壁が崩れ、リヴェエリアはユウマと会う。ユウマが勝っていたことは知っていた。戦闘が少しでも長引けば、戦局は変わり、ユウマがワイヴァーンのように屠られていたかもしれない。

「本当にお前は私を飽きさせないな、私ももう少し若ければ、私も闘志に火が付いていたかもな」

ユウマを背中に背負い、地上に向けて歩き出す。

地上に着くと、怪物祭りは終わっていて、夕陽は眩しく照り付いていた。リヴェエリアはユウマを背負いながら、手で太陽を覆う、だがその眩しきは隠していても、眩しかったように感じた。

「私も少し頑張ってみようか」

そう誰が呟いて、街の中に溶けていった。

「君も大変な目にあっていたんだね」

「いやまあ、リヴェエリアさんがいなくなったら多分死んでいた気がします」

オレはヘステイア様にホームでステイタス更新を受けていた。あのあとリヴェエリアさんが背負って、ここまで送り届けてくれたらしい。1日ほどオレは寝込んでしまっていて、起きて今この状況に至っているということになっている。

ベルとヘステイア様の話もステイタス更新しながら聞いた。
モンスター・ファイリア
怪物祭りから逃げ出した怪物と戦っていたという、その時にベルは
ヘステイア
神様ナイフという、ものをもらった。オレの場合は、ヘステイア
神様ガントレットらしい。

今ベルはというと、ダンジョンに行くためにポジションやらを買っているらしい、そのままダンジョン前の噴水で待っているとされたので、オレもステイタス更新が終われば、すぐに向かうつもりだ。

ステイタス更新が終わったのか、背中に違和感がなくなる。

「けどユウマくんが無事でよかったよ……………はい、ステイタス更新終わり」

ステイタスを写した紙をオレに渡してくる。

ユウマ・アルセルド

L v. 1

力 : F 302 ↓ D 567 耐久 : G 207 ↓ D 5

07 器用 : F 374 ↓ C 608 敏捷 : F 348 ↓

C 624 魔力 : H 97 ↓ E 400

《魔法》

【ブースト】

・ 五段階詠唱

・ 身体能力強化

・ 唱えることに魔力大量消費 マインド

・ 詠唱式 ブースト【強化】

・ 解呪式 ロスト【弱体】

《スキル》

【大切守護】 ライカラムフーヴェ

・ 守りたい思いが強ければ強いほど早熟する。

・ 守りたい思いが続く限り効果持続。

・ 絶望から立ち上がる時、超効果向上。

「ほんと、今回の君の成長速度はありえないほど上がってるね」

「こ、こ（こ）こ（こ）これ!?ほんとですか!?!」

「自分の子供たちに嘘なんてつかないさ」

へステイア様は立ち上がり、向かいにあるソファに座った。

「あと君に朗報があるんだ」

「朗報?」

「……………」

「……………ランクアップができるよ」

「ほんとですか!?!それ!?!けど、Lvの表示が1のままなんですけど」

「だから言ったろ?できるってさ」

という（こ）とはできるけど、してない。っていうことになるのか。な

んでそんなことを？ランクアップした方がLv1とLv2差は歴然と言われるほど、差が開く。ならばランクアップした方が得ということになる。

「へフアイストスに聞いたんだ。ランクアップするならステイタスがSがついた時にあげた方がいいってね。その方がランクアップした時に、もっと成長するって前に言ってたのを思い出したんだ」

前というのはどのくらい前なのだろう、神さまがいう前というのは、神以外からしたらずっと昔ということになるのだろうか。

そんな、くだらないことを考えていると、ヘステイア様は話を進める。

「もし君がランクアップしたいというなら、ボクは止めはしない。ランクアップしよう。けれどボクを信じてくれるというならば、ステイタスが成長するまで待つて欲しいんだ」

ヘステイア様は自分を信じて欲しいと懇願する。ヘステイア様は「眷属を持ったのは初めてで至らない点ばかりでごめん」とか「ボクがしっかりしてないばかりに負担をかけてごめん」など、何度も聞いている。

けどヘステイア様がオレたちを想ってる気持ちは、普通の神様よりも優っていると思っっている。オレらのためにへフアイストス様から武器を作ってもらったり、バイトをしてくれたりなど。オレらのためにしてくれてる神様を信じないわけがないだろう。

ならオレが答える言葉は決まっっている。

「そんなのきまってますよ、ヘステイア様を信じます」

オレはヘステイア様に恩返しをまだしていないと思っっている。ヘステイア様は「君たちがいるだけで幸せだよ！」などと言ってくれているが、オレはそれだけでは足りないと思う。なら返せるものがあるば返していきたいとそう決意した。

「ユウマくん……………ユウマくん！やっぱり君はいい子だね！べルくんと同じくらいいい子だよ！」

ソファから飛び出しオレが座っているベットの方へ飛びついてくる。目標はベットではない、オレにだ。ヘステイア様の豊満な胸が顔

に当たって自分が赤面しているのがわかる。

「ちよっ!?抱きつかないでください!!」

「そういえば」とオレは呟いてから、ヘステイア様と触れて思い出した。

ヘステイア様をひっぺがしてから、オレが伝えてなかった言葉を、言い忘れていた言葉を今伝える。

「ヘステイア様。ヘステイア様の武器ありがとうございます。あれがなければ、死んでしまってもおかしくない状況でした。ヘステイア様のおかげでまだこの命を繋いでいられます。この命、ヘステイア様に捧げることを誓います」

オレはベツトから降りて、片膝を曲げて頭を下げる。

「そ、そんな硬くならないでくれ、ボクと君との仲じやないか!今まで通りにしてくれ!ボクは君たちが好きでこんなことをしたんだ」

ヘステイア様はオレの行為に慌てながら、訂正していく。ヘステイア様はその後に、「けど」と付け加え話を続ける。

「ボクは眷属がいなくて、ずっと一人ぼっちだったんだ。勧誘したけど断られ、勧誘して断られ続けたんだ、けどすぐにでもボクのファミリアに入りたいと言ったのはユウマくんとベルくんだけだったんだ。嬉しかった、涙が出そうだったよ」

微笑みながら、胸に手を当て、何かを思い出すように、上を向いていた。ヘステイア様の瞳が潤んでいるのは気のせいだろうか。

「だから、君たちに恩返しをしたいとそう思えたんだよ」

「ヘステイア様……………」

「だからボクのもとにずっといてくれるかい?」

ヘステイア様はオレに手を差し出して、女神様が微笑んでいた。その答えももちろん決まっている。

「はい、ずっとそばにいます」

差し出した手をオレは壊れないように、握りしめた。握りしめた手もオレの手を優しく包み込んだ。

「わるい!遅くなった!」

「ううん、全然大丈夫だよ」

オレは両膝に手を当てながら、肩で息をして謝罪をすると、ベルはそんなことを気に留めてもないように、首を横に振った。

オレは汗をぬぐいながら、顔を上げると栗色の髪をして、大きなバックパックをその子の2倍、3倍、いやそれ以上の大きさを背負っていた。フードを深くかぶっているが小柄なので小人族バルウムだろうか？

「あ、あの、そんなに見つめられたら恥ずかしいです……………」

「お、おう!? すまん!」

オレが注意深くその子を見ていたらしく、その子は顔を赤らめさせながら呟くと、オレは反射的に一歩下がってしまった。

「えーつとその子は?」

「えつとこの子はサポーターなんだけど、この子も今日はパーティーに入れようかなって」

「ふーん」

何か怪しかった気がした。この感情は直感に過ぎなかった。そう、ただの直感、オレはベルの決定したこともあつて、断ることができなかったが、彼女の瞳が怪しく輝いていた気がした。

「ファミリアはこのファミリアなんだ?」

「[ソーマ・ファミリア]ですよ、黒髪のお兄さん。割と有名な派閥だとリリは思います」

ダンジョンの1階層、そこに移動して会話を交わす。モンスターの警戒も怠らない。1階層〜4階層はゴブリンやコボルトといった低級モンスターばかりで種類も多くない。今のオレやベルに比べればダンジョンで居眠りをしない限りやられることはまずないだろう。ベルもステータスがEまでいったと聞いた。

そして彼女が呟いた「[ソーマファミリア]確か主神がお酒を作ってるファミリアと聞いたことがある。そして団員も問題を起こす人達が多いらしい。お金に困ってるわけでもないのに、お金を異様に求めたりするらしい。彼女もそうなのだろうか? ベルから聞いたところ、お金が少なくなってきたから稼ぎにきたと、そう言ってた。

「あ、ごめん、自己紹介まだしてなかったな、オレはユウマ・アルセルド、ベルと同じファミリアの団員だ、君は？」

「私はリリルカ・アーデですよ、ユウマ様。自己紹介が遅れて申し訳ありません」

「よろしく、リリルカ。えーっと君は小人族パルウムでいいのかな？」

「いえ、違います」

するとリリルカは深くかぶっていたフードを脱ぎ、ぴよこつと揺れ動く、可愛らしい獣の耳があらわになった。

「リリは犬シアンスロープ人です」

「リリルカは犬シアンスロープ人なのか、てつきり小柄だから小人族パルウムかと」

「あと、リリのごとはリリルカではなく、リリとお呼びください」

「わかった、リリ。でなんでオレに様付けしてるんだよ。そういうのむず痒いんだが」

「ねえ、ユウマ」

リリは首を大きく振り、オレに近寄ってきた。

「冒険者様とサポーターは違うんです！

「そんなことないと思うけどなあ」

「ねえ、ユウマ！」

「いいえ！あるんです！だからリリは様付けで呼んでいるんです」

「ユウマったらッ!!」

声ができる方に、振り向くとベルは一人でコボルトと接敵をしていた。

「お願いだから戦ってよ!!!」

オレが見たことないほどの顔を怒りに染めて、オレとリリに唾を飛ばす勢いで、怒鳴っていた。

「す、すまん」

無意識的にオレは謝ってしまっていた。まあ、実際オレが悪いから謝るのは普通なんだけどね。

「ベル様、ベル様。あの方は何か他の駆け出し冒険者とは違う動きなんです、ユウマ様は本当に駆け出し冒険者何ですか？」

今僕たちは1階層を攻略し、4階層へと歩き出していった。僕も戦いに参加したいけれど、ユウマが鍛錬をしたいと言っていたので、手は出さずにユウマ一人でモンスターを狩っていた。

その姿を見ていたリリは僕に話しかけた。たしかにあの動きは駆け出し冒険者の動きではない。視野が広く、背後にいるモンスターなど位置を把握していたように、軽々不意打ちを躲し、後ろ回し蹴りで、モンスターを屠った。あれが駆け出し冒険者というなら、今の僕たちはなんなのだろうかと卑下してしまうほど動きが素早く、一撃が重かった。

「見てたんですけどベル様も確かに冒険者になったばかりだとは思えない強さなんですけど、ユウマ様は何か一皮向けたような…うまく言葉にできなくてもどかしいのですけれど」

確かに、怪物の祭モンスターファイリアが終わってから僕と、いや僕よりも大変な事態に陥ったと、そう神様から聞いた。やっぱりそこで一皮向けたのだろうか。このままじゃユウマに置いていかれるばかりだ。なら追いつかないと、ユウマを追い抜かないと、ヴァレンシユタインさんに追いつくなんて、夢のまた夢だ。

「ユウマ！僕も戦うよ！」

「お、そうか？なら一緒に片付けるか」

神様ナイフを構えて眼前の敵を見据える。

僕、ユウマよりも強くなりたい！守られるだけじゃない！今度は僕が守ってあげるんだ！

「はあああああああツツ!!」

強くなろうとする二人をリリは冷えた瞳で、彼らのことを見ていた。さっきまでとは雰囲気が違う、元氣よく話していた彼女はいい。

【決意】

「ベル様、ユウマ様。今日の報酬の話なんですが……………」

「うん。こんなに手伝わってもらったし、普通に山分けで……………」

「ああ、別に山分けで構わない。リリには結構助けてもらったしな」

オレとベルとリリはダンジョン探索を終え、バベルの塔を登っている途中だった。

「いえ、回収した魔石とドロップアイテムは全てベル様とユウマ様にお渡しします。どうか懐を温めてください」

「ええっ！それじゃありり、タダ働きだよ!？」

「これでベル様とユウマ様から信用を得られるなら安いものです。今日はリリの価値付け、信用に得られる相手なのか見極める通過儀礼なのですから」

「うっ、バレてたのか」

「むしろそのくらいやってくれないとリリが困ります。流石に見知らぬ人をホイホイと信じられる方とダンジョンに潜りたくはありませんかからね」

そんな話をしていると、バベルの塔をいつの間にか抜けていて、夕日がおれたたちのことを照りつけていた。

「では、リリはこの辺で、また雇いたいと思ってくれたならば、リリはバベルにいますから、いつでも会えます。リリは決して逃げませんから、ゆっくりお考えになってくださいね」

そして彼女は満面の笑みを浮かべて、街の中へ溶けていった。

「へえ〜【ソーマ・ファミリア】のサポーターかあ〜」

「エイナさん何か知ってるんですか？」

オレは魔石を換金しに行ってる時に、エイナさんとベルはリリ、サポーターのことを相談しているようだった。

【ソーマ・ファミリア】って探索系のファミリアなんだけど、お酒も少し売ってて、【ソーマ・ファミリア】の冒険者はどこか必死っていうか」

「え？それって結構問題なんですか？」

ベルが少し興味深そうに尋ねると、エイナさんは右の人差し指を口角に当て、少し考えてから口を開く。

「いや、問題ってわけではないんだけど、やっぱりなんか普通のファミリアじゃないっていうか、でも最後にはベル君とユウマ君が決めるんだから、雇うからには、ちゃんと責任取ってあげないとダメだよ」

たしかに最後にはオレたちが決める、そんな当たり前なことを忘れていた。エイナさんから貰えるのは実質助言アドバイスのようなもの、エイナさんがとやかく決めることではない。オレたちが今見てきたことを判断して雇うのだ。

「そうですね、わかりました。ありがとうございますエイナさん」

「うん、ベル君も気をつけてね、あとユウマ君も」

ニツコリとエイナさんは笑顔で送り出してくれる。オレにも笑顔を向けてきて、うっかり顔が赤面する。こんなことで赤面するとは、オレもベル並みに女の子に耐性がないのだろうか。

軽く伸びをしてから、ギルドの出入り口へとつま先を向ける。

「あれ……………ベル君？」

「何ですか？」

「ナイフ、どこにやったの？」

「ナイフ？」

ベルの腰のあたりにいつも装着していた、神様ナイフが鞘だけがあり、肝心の中身が空だった。

ベルも確かめようと自分の腰についているナイフを探そうと手探りで触り出す。ベルもないということに気がついたのか、ベルの顔から血の気が引いていく。

「お、落としたあああああああああ!？」

オレのガントレットと形見の剣はあった、よかつた……………じゃねえわ、ベルのナイフ探さない!!

オレとベルは速攻でギルドから全速力で駆けだした。

「こんな業物のナイフがこんな安値なはずがない」

暗がりな路地を歩きながらリリは呟く、先ほどまでベルが使っていたナイフを左手に持ちながら、このナイフが業物のナイフだと認めさせるには、鞘が必要だ、危険な賭けだが、鞘を持ち去ることを考慮しなければ。

「こんな路地通って大丈夫なの？リユー？」

「こちらの道の方が時間短縮ができます、道さえ覚えてしまえば、なんてことはないです、シルも覚えてしまえば便利ですよ」

「そう意味じゃないんだけどなあ……………」

リリの向かい、前方から緑のエプロンを着た、エルフとヒューマンがこちらに向かって降りてきた、とつきにリリはナイフを左手の袖の内に隠した、自然に下を向いて歩いていく。

「待ちなさい」

ビクツとリリの肩が揺れる、リリは足を止めて、汗が吹き出しそうなのを抑える。この声音は先ほどのエルフだろう。後ろを見ると顔にボロがでてしまうかもしれないので、リリは後ろを振り向かず、ナイフをギュと握りしめた。

「そのナイフを見せて欲しい、知人のナイフに似ているもので」

「み、見間違いではないですか？このナイフは私の……………」

ここでリリと名乗れば、素性がバレてしまうかもしれないと思ったリリは、自分のことをリリと言わなかった。この窮地を脱出するためには、誤魔化し通すしかない、だがリユーからすれば、子供の駄々に過ぎなかった。逃げれば、回り込み無理やり確認するまでのこと、どう選択肢を取ったとしても、運命は決まっているということだ。

「抜かせ」

「ヒエログリップ【神聖文字】が刻まれたナイフの持ち主など私は二人しか知らない」

「ギヤあツツ!?!」

お使いで買ってきた林檎をリリが持っている左手にリユーの神速

を持って当てる。リリの左手に林檎が当たり、林檎が砕け散る。それがどれほどの威力か、言うまでもない。

リリはナイフを道端に落とし、そのまま一目散に逃げようと思ったが、リユーはリリに詰め寄り、左足を振り上げながら呟いた。

「歯を食いしばった方がいい」

ふぎけるな、この姿勢はまるで子供たちが遊ぶ、球蹴り遊びのように、左足を自分の体に振り抜くつもりだ。

「ふんぎやあ!?!」

リリはボールのように、路地の奥へと吹き飛ばされていく

ベルはダンジョンに落ちたかと思えば調べに行き、オレはというと来た道に落ちたかと思えば来た道を戻っていた。汗をダラダラかきながら道を走っている人物とは結構滑稽に見えるものだろうか？

走っていると路地裏から大きな音が聞こえた。呑気にゴロゴロしていた猫たちが、路地から走ってでてくる。そのことに奇妙を覚えたオレは路地をのぞいてみた。

「ふにやああ!?!」

「うおおおッ!?!」

リリがオレの体にぶつかり、そのまま受け止めきれずに、倒れてしまう。オレは背中を強打したので、背中をさすりながら、リリが立ったタイミングでオレも立ち上がる。

「リリ? どうしてこんなところに、ってか何したんだお前」

「ふえ? ユウマ様?」

すると勢いよく次に飛び出してきたのは、豊穰の女主人ではたらくリユーさんだった。

「犬 人?」

リユーさんが疑問を抱いているときに、リユーさんの後を追いかけてきたように見える、シルが飛び出してきた。

リユーさんはリリに何か恨みがあるように見えたので、リユーさんの顔を見ながら口を開く。

「リユーさんこの子になんか恨みがあったんですか?」

「いえ、勘違いのようでした」

「ふーん、そうなんだ。つて！リユーさん！シル！ベルのナイフ！真つ黒のナイフ見ませんでした!？」

オレは慌てて、リユーさんとシルに尋ねる。リユーさんとシルはオレの慌てぶりを見た後、リユーさんとシルは顔を見合わせて笑っていた。

「これですか?」

リユーさんから下から上まで真つ黒のナイフを見せられる。

..... あった、あった!!良かつたという安堵と喜びに襲われオレはつい自分のことのように興奮してしまった。

「リユーさんありがとうツ!!」

「ちよつ!?!ユウマ!!」

オレは嬉しさのあまり、リユーさんに抱きつき、感謝の意を表したのだが、今考えると命知らずのことをしていたと思う。エルフは人と接触するのを嫌がる。心を許した人にしか、触れられない。そのことを忘れオレは抱きついていた。

「は、離れてください.....」

「あ、す、すいません」

オレは言葉を聞いた瞬間、我に戻り、手を離し一步下がる。殴られると思い、恐る恐るリユーさんの顔を見してみる。顔を赤くし、オレの方を見ずに、足元を見て、モジモジしているのを見た。その姿を見て、一層オレは顔を赤くしてしまった。側から見れば恋人同士が、初めてキスをしようとしているようなそんな雰囲気。

「リユーやるねえ、このまま.....」

「シ、シ、シル!!な、な、なにをバカなこと?」

リユーさんがシルにこれ以上口を開かせないように、両手に持つてる荷物を下に瞬時において、シルの口をふさぐ。

シルは「むううう!!」と苦しそうになにか訴えているが、オレが助けに行けば、オレが逆にリユーさんに矛先を向けられそうで怖いので、動かずに立ち尽くす。

「こ、これ、お探しのものです!!シル行きますよ!!」

「ベルさんによろしく言っついてくださーい」

リユーさんはナイフをオレに胸に押し付け、シルの手を引いて帰っていく。シルはリユーに手を引かれながら、こちらに手を振っていた。オレも合わせて手を振るが、オレはリユーさんの今の反応を見て心臓が高鳴っていた。

もしかしてあの反応リユーさんオレのこと？ いやいや、ありえない！ そ、そんなことよりベルにこのナイフ返さないと！

「あ、リリ。多分明日もダンジョンに行くからバベルの塔にいてくれ、多分明日もサポーターを頼むと思うから」

「え？」

オレはリリの返事を聞く前にダンジョンに向かって走り出す。流石に下の方まで入ってないだろと思いつながら、走り出す。

「ありがとうユウマー！ 今度豊穰の女主人に行ってお礼しないと。ああ神様もう落したりしません」

ベルはナイフを大事そうに胸にしまいながら、思いを込めていた。けどリリ、なんでリユーさんに追いかけられていたんだろうか、見間違いと言っていたが、高レベルの冒険者が見間違いなど起こすだろうか？ リリには何かある。

ならば明日ダンジョンに行く約束なんてするべきではないと思うだろう、それは大間違いだ。オレは探索するときリリを観察していた、オラリオにずっといるせいかな、いい奴と悪い奴の区別はついてきた。

多分彼女はいい子だろう。けれど今の彼女には何かある。何かあるのなら守ってあげたい。理由はオレであるから。オレは困っている人がいるなら助かるし、悪い奴がその子を害を及ぼしているのなら、悪を倒す。英雄を目指すと言うのはそういうことだ。

ベルもきつと同じ気持ちなんだろう。英雄を目指すオレたちにとって、きつと救わなければいけない。ベルが言っていた。「女の子は守るもの」だと、ならば救わない手はないだろう。けれど彼女は何を隠しているのだろうか。

「帰ろうユウマ、きつと神様がお腹すかせてまってるよ」

「ああ、そうだな。早く飯作ってあげないとな」

オレとベルは目指すものは同じものだけれど、きつとオレとベルは同じ道を辿って英雄になることはできないだろう。なぜなら、オレはまっすぐなベルと何かズレている。決定的なものが。この感覚は直感、もしかしたら俺の勘違いなのかもしれない。

もしも、オレが道から外れた時、ベルはまた救ってくれるだろうか。だらんと下がっている左手にギユツと力を込める。

きつとリリを助けたという気持ちは間違いではない、オレはリリルカ・アーデを助ける。